京都市内遺跡試掘調査報告　令和五年度

二〇二四　京都市文化市民局

京都市内遺跡試掘調査報告

令和５年度

2024年３月

京　都　市　文　化　市　民　局

京都市内遺跡試掘調査報告

令和５年度

2024年３月

京　都　市　文　化　市　民　局

例　言

1．本書は京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した令和５年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。令和５年１月から 12 月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果があったものを本文で報告し、その他のものを一覧表に列記する。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載する。

2．本書の執筆分担は、各文の末尾に記した。なお執筆者の意向を尊重し、文中で使用する用語については特に統一していない。

3．本書報告の調査のうち、基準点を測量した調査の方位および座標は、世界測地系平面直角座標系Ⅵによる。標高は T. P.（東京湾平均海面高度）である。またこれ以外の場合は、既存公共物などを仮基準点（KBM）として用いている。

4．本書で使用した調査位置図は京都市発行の都市計画基本図（縮尺１／2,500）を調整し、作成したものである。このほか、巻末の図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。

図版１～13　１／8,000　図版 14 ～ 19　１／10,000

5．本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、平尾正幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、2019 年に準拠する。

(西暦)	750		840		930		1020		1110		1170		1260		1350		1410		1500		1590		1680		1740		1800		1860
期	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		13		14		
段階	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B
(世紀)	8		9		10		11		12		13		14		15		16		17		18		19						
奈良時代	平安時代										鎌倉時代				室町時代				戦国時代		江戸時代								

6．本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』2016 年度版に準じる。

7．調査一覧の遺跡名は、平安宮跡、平安京跡、長岡京跡の官衙・条坊を優先して記載した。また調査日は簡略に記した。

8．遺物整理にあたっては、飯沼俊哉、上茶谷美保、上別府亜紀、早川仁志、林友紀、松本和子、山口大地、吉本健吾の協力を得た（五十音順）。

9．調査及び本書の作成は、京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課が担当し、（公財）京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。

地区設定概念図

目　次

例　言

Ⅰ　試掘調査の概要 …… 1

Ⅱ　平安京跡 …… 7
1　平安京左京九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内（東寺旧境内） …… 7
2　平安京右京七条一坊八町跡 …… 10
3　史跡西寺跡、平安京右京九条一坊十一町跡、西寺跡、唐橋遺跡 …… 16

Ⅲ　その他の遺跡 …… 24
1　北野天満宮 …… 24
2　山科本願寺跡（寺内町遺跡） …… 26
3　鳥羽離宮跡、竹田城跡、鳥羽遺跡 …… 30
4　下鳥羽遺跡 …… 34
5　長岡京左京一条四坊三・四町跡、一条条間南小路跡、東土川遺跡 …… 40
6　大藪遺跡 …… 44

Ⅳ　調査一覧 …… 48

図版

報告書抄録

図 版 目 次

図版１　平安宮
図版２　平安京左京北辺～三条一・二坊
図版３　平安京左京北辺～三条三・四坊
図版４　平安京左京四～六条一・二坊
図版５　平安京左京四～六条三・四坊
図版６　平安京左京七～九条一・二坊
図版７　平安京左京七～九条三・四坊
図版８　平安京右京北辺～三条三・四坊
図版９　平安京右京北辺～三条一・二坊
図版10　平安京右京四～六条三・四坊
図版11　平安京右京四～六条一・二坊
図版12　平安京右京七～九条三・四坊
図版13　平安京右京七～九条一・二坊
図版14　太秦地区、洛北地区
図版15　北白川地区、洛東地区
図版16　伏見・醍醐地区、鳥羽地区
図版17　伏見・醍醐地区、鳥羽地区
図版18　長岡京地区
図版19　南桂川地区、京北地区
図版20　遺構　平安京右京七条一坊八町跡
　1　３区溝４と七本松通（北東から）
　2　３区溝４完掘状況（南から）

挿 図 目 次

地区設定概念図 …… i

Ⅰ　試掘調査の概要

図 1　届出件数の年間推移 …… 1
図 2　試掘調査件数の年間推移 …… 2
図 3　試掘調査結果に基づく指導の割合 …… 3
図 4　重機掘削作業状況（東から）…… 4
図 5　人力掘削作業状況（南東から）…… 4
図 6　土層断面の分層（北東から）…… 5
図 7　試掘結果に基づく発掘調査（南から）…… 5

Ⅱ - 1　平安京左京九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内（東寺旧境内）

図 8　調査位置図 …… 7
図 9　調査区配置図 …… 7
図 10　調査区平・断面図 …… 8
図 11　溝２出土遺物実測図 …… 9

Ⅱ - 2　平安京右京七条一坊八町跡

図 12　調査位置図 …… 10
図 13　調査区配置図 …… 10
図 14　１区平・断面、２区断面図 …… 11
図 15　３区平・断面図 …… 12
図 16　溝４検出状況（南から）…… 12
図 17　溝４出土遺物実測図・拓影（１）…… 13
図 18　溝４出土遺物実測図・拓影（２）…… 14
図 19　周辺調査との遺構位置関係図 …… 14

Ⅱ - 3　史跡西寺跡、平安京右京九条一坊十一町跡、西寺跡、唐橋遺跡

図 20　調査位置図 …… 16
図 21　西寺跡周辺調査位置図 …… 17
図 22　調査区配置図 …… 19
図 23　３区溝検出状況（東から）…… 20

図 24　1区平・断面図 …… 21
図 25　2区平・断面図 …… 22
図 26　3区平・断面図 …… 22

Ⅲ - 1　北野天満宮

図 27　調査位置図 …… 24
図 28　調査区配置図 …… 25
図 29　1・2区断面図 …… 25

Ⅲ - 2　山科本願寺跡（寺内町遺跡）

図 30　調査位置図 …… 26
図 31　調査区配置図 …… 26
図 32　各調査区西壁断面図 …… 27
図 33　周辺調査との遺構位置関係図 …… 28

Ⅲ - 3　鳥羽離宮跡、竹田城跡、鳥羽遺跡

図 34　調査位置図 …… 30
図 35　調査区配置図 …… 30
図 36　調査区平・断面図 …… 31
図 37　出土遺物実測図 …… 31
図 38　竹田城築城以前遺構位置図 …… 32
図 39　竹田城堀復原図 …… 32

Ⅲ - 4　下鳥羽遺跡

図 40　調査位置図 …… 34
図 41　調査区配置図 …… 34
図 42　1区平・断面図 …… 36
図 43　2区平・断面図 …… 37
図 44　出土遺物実測図 …… 38

Ⅲ - 5　長岡京左京一条四坊三・四町跡、一条条間南小路跡、東土川遺跡

図 45　調査位置図 …… 40
図 46　調査区配置図 …… 40
図 47　調査区平・断面図 …… 42
図 48　出土遺物実測図 …… 43

Ⅲ - 6　大薮遺跡

図 49　調査位置図 …… 44
図 50　調査区配置図 …… 45
図 51　２区全景（南西から）…… 45
図 52　出土遺物実測図 …… 45
図 53　調査区平・断面図 …… 46

表　目　次

表１　地区ごとの試掘調査件数（令和５年）……2
表２　西寺跡試掘調査一覧表 …… 18
表３　出土遺物概要表 …… 54

Ⅰ　試掘調査の概要

1　京都市内の埋蔵文化財行政と試掘調査

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地の件数は、令和６年１月現在で843件を数える。その種類は、平安京跡、長岡京跡に代表される都城跡をはじめ、宮殿跡、離宮跡、邸宅跡、寺院跡、城跡、集落跡、古墳、窯跡、散布地と多岐にわたる。またその存続期間は旧石器時代から近現代までと幅広く、遺構面は重層的に存在する。このため集落と都城跡、古墳群と城跡など、異なる性格を備えた遺構が並列・重複して検出されることも珍しくなく、これらが遺跡の理解をより難しいものとしている。

京都市では、これらの埋蔵文化財包蔵地を保護する上で注意を要する程度に応じて「重要遺跡・小規模遺跡」「特別一般遺跡」「一般遺跡」「一般遺跡に準ずる遺跡」の４種に分類し、要綱によりそれぞれの扱いを定めている（『周知の埋蔵文化財包蔵地内における取扱い要綱（京都市域内）』令和５年１月４日改訂）[1]。包蔵地内で土木工事や開発行為が計画された場合、京都市文化財保護課（以下、当課という）は遺跡の特性と工事規模に応じて「発掘調査」「試掘調査」「詳細分布調査（立会調査）」「慎重工事」の４種の行政指導を行う。このうち試掘調査は、遺跡の有無や遺構の残存状況、その範囲等を把握し、更なる措置が必要であるかを判断する作業である。令和５年度現在、当課では計14名の文化財保護技師が行政指導に従事している。

図１　届出件数の年間推移

試掘調査の結果、遺跡の残存状態が良好であり、かつ工事による遺構の損傷を免れないと判断された場合は、設計変更による遺跡の保護もしくは対象範囲の発掘調査が指導される。令和５年は昨年に比べて届出総数は減少し、これに即して試掘調査件数も減少した。

２　令和５年の試掘調査概要

（１）試掘調査の内訳と件数

令和５年１月～12月に文化財保護法第93条に基づいて提出された届出と、同第94条に基づく通知の件数は、あわせて1,327件に上る。この件数は、前年比で139件の減少（10.5％減）となる。令和５年は新型コロナウィルス感染症が５類感染症に分類され、ようやく世相に好転の兆しが見えはじめた年であるが、一方では急激な円安と世界的な物価高に苦しめられた年でもある。コロナ禍後の景気回復が需要の逼迫を生み、開発行為も建築資材の入手困難や人的不足による中断・延滞が相次いだ。これらの影響が、経済活動を通して届出件数の減少に繋がったとみてよいだろ

表１　地区ごとの試掘調査件数（令和５年）

地　区	1～3月（令和4年度）	4～12月（令和5年度）	小計	地　区	1～3月（令和4年度）	4～12月（令和5年度）	小計
①平安宮域	3	10	13	⑦洛東地区	1	11	12
②平安京左京域	5	13	18	⑧伏見・醍醐地区	0	2	2
③平安京右京域	4	17	21	⑨鳥羽地区	2	5	7
④太秦地区	1	3	4	⑩長岡京地区	3	3	6
⑤洛北地区	3	3	6	⑪南桂川地区	1	5	6
⑥北白川地区	2	0	2	⑫京北地区	0	1	1
				合　計	25	73	98

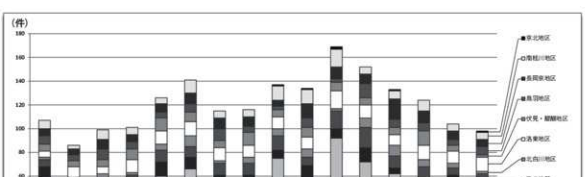


図２　試掘調査件数の年間推移

う。

届出・通知に対する保護課の指導内容は、発掘調査15件（前年14件、１件増）、試掘調査122件（前年比9.0％減）、詳細分布調査499件（同9.7％減）、慎重工事691件（同10.8％減）である。発掘調査は微増であるが、これ以外の指導では概ね１割程度の減少となる。

試掘調査の実施件数は98件（同6.1％減）で、リーマンショックに喘いだ平成21～22年以後、10年ぶりに100件を割り込んだ。地区ごとの内訳では、平安宮域13件（前年度６件）、平安京左京域18件（同26件）、平安京右京域21件（同21件）、太秦地区４件（同８件）、洛北地区６件（同６件）、北白川地区２件（同４件）、洛東地区12件（同10件）、伏見・醍醐地区２件（同５件）、烏羽地区７件（同５件）、長岡京地区６件（同７件）、南桂川地区６件（同６件）、京北地区１件（同０件）である。平安宮域の開発は倍増したが、平安京左京域では３割以上の大幅減となっている。なお、試掘調査の直前でのキャンセルや日程延期は昨年と同様に多く、先行きの不透明さを如実に表す状況となった。

試掘調査を実施した98件のうち24件に対して発掘調査の実施を指示した（「Ⅳ調査一覧」48～54頁参照。№も一覧に対応）。発掘調査を実施したのは、当課２件（№28・33）、（公財）京都市埋蔵文化財研究所６件（№４・31・56・71・88・95）、古代文化調査会３件（№９・17・94）、（株）文化財サービス２件（№51・80）、（株）アルケス２件（№６・68）、（有）京都平安文化財１件（№22）、（株）島田組１件（№42）、（株）地域文化財研究所２件（№23・48）、NPO法人平安京調査会２件（№73・91）の計２１件で、３件（№5・36・43）が現在協議中である。以上のほかに、設計変更等により遺跡の地中保存が図られたことから、発掘調査に至らなかった例が８件ある。

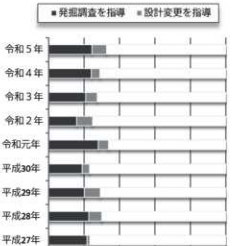


図３　試掘調査結果に基づく指導の割合

（２）試掘調査成果の概要

次に地区ごとに実施した試掘調査の概要を述べる。

①平安宮域（№１～３、26～35）

平安宮域では、中和院跡、豊楽院跡、大蔵省跡、中務省跡、内膳司跡、漆室跡、主殿寮跡、内蔵寮跡、縫殿寮跡、主水司跡、掃部寮跡、右馬寮跡、左兵衛府跡、宴松原、一条大路、聚楽第跡、聚楽遺跡の調査を実施した。このうち聚楽第跡（№28）、中和院跡（№31）、中務省跡（№33）の３件について、発掘調査を指導した。

聚楽第跡（№28）では、試掘調査時に大規模な落

込みを確認したが、これが後の発掘調査において聚楽第の西外堀である可能性が示された。中務省跡（№33）では、試掘調査時に発見した平安時代～近世初頭の遺構群が、中務省の北外溝や桃山期の大規模な地業跡であることが明らかとなった。なお中和院跡（№31）の発掘調査は現在も継続中であるが、これまで不明であった中和院内部の構造解明が期待される。いずれも試掘調査を端緒として著名な遺跡の記録保存に繋がった例である。

②平安京左京域（№4～8、36～48）

平安京左京域では、平安京跡、旧二条城跡、妙顕寺城跡、等持寺跡、教王護国寺境内（東寺旧境内）、高陽院跡、二条城北遺跡、三条せと物や町跡、烏丸御池遺跡、烏丸綾小路遺跡、寺町旧域、東市跡、羅生門跡の１３遺跡で試掘調査を行った。試掘調査18件のうち７件で発掘調査を、１件で設計変更を指導している。このうち今年度中に着手された発掘調査は４件である。

本書では、九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内（東寺旧境内）（№７）の成果を報告する。

③平安京右京域（№9～12、49～65）

右京域では、平安京跡、史跡妙心寺境内、史跡西寺跡、御土居跡、西京極遺跡、衣田町遺跡、堂ノ口町遺跡、西寺跡、唐橋遺跡の９遺跡で調査を行った。試掘調査21件のうち、３件で発掘調査を指導した。

本書では、皇嘉門大路側溝の発見に伴い補足調査（試掘調査の延長）を行った七条一坊八町跡（№10・58）と、地中にて遺構保存が図られた史跡西寺跡、九条一坊十一町跡、西寺跡、唐橋遺跡（№63）の調査について報告する。

④太秦地区（№13、66～68）

仁和寺院家跡、嵯峨遺跡、太秦馬塚町遺跡、常盤仲之町遺跡の４遺跡で調査を行った。このうち、常盤仲之町遺跡（No.68）では、ピット、土坑、溝、井戸を有する中世遺構面を検出したため、発掘調査を指導した。調査の結果、周辺一帯に遺構面が良好に残存することが明らかとなった。

⑤洛北地区（№14～16、69～71）

栗栖野瓦窯跡、植物園北遺跡、御土居跡、相国寺旧境内、北野天満宮、北野廃寺、北野遺跡の７遺跡で調査を行った。白鳳寺院として知られる北野廃寺では、試掘調査時に北野廃寺に関連する瓦

図４　重機掘削作業状況（東から）

図５　人力掘削作業状況（南東から）

が多数出土したため、発掘調査を指導した（№71）。その結果、北野廃寺と同時期の掘立柱建物が複数検出された。また本書では、史跡御土居の近接地でもある北野天満宮（№70）での調査成果を報告する。

⑥北白川地区（No.17・18）

白河街区跡、法勝寺跡、岡崎遺跡で調査を行った。白河街区跡の調査地（No.17）は、かつて寺院の石積基壇が発見された区画の隣接地で、遺構の連続が予測された地点である。試掘調査で平安時代～近代の遺構群の広がりを確認し、発掘調査を指導した。その結果、平安時代後期～鎌倉時代の石積基壇のほか、弥生時代の周溝墓や江戸時代の藩邸庭園等、多彩な遺構が発見された。

⑦洛東地区（No.19、72～82）

名勝円山公園、人康親王山荘跡、安祥寺下寺跡、大塚遺跡、山科本願寺跡（寺内町遺跡）、左義長町遺跡、中臣遺跡、法住寺殿跡、法性寺跡の９遺跡で試掘調査を行った。試掘調査12件のうち、２件で発掘調査、２件で設計変更を指導している。安祥寺下寺跡（No.73）の試掘調査では、平安時代の整地層や溝、土坑を確認したが、後の発掘調査では飛鳥時代の土坑も発見されている。また左義長町遺跡の試掘調査（No.80）では、平安時代の土坑を確認したため発掘調査を指導したが、後の調査において古墳時代後期の竪穴建物が検出された。

⑧伏見・醍醐地区（№83・84）

がんぜんどう廃寺、伏見城跡で調査を行った。伏見城跡の試掘調査（№84）では、桃山期に遡る可能性がある遺構埋土を確認したため、設計変更が図られた。

⑨鳥羽地区（№20・21・85～89）

唐橋遺跡、深草遺跡、鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡、竹田城跡、富ノ森城跡、淀城跡、木津川河床遺跡の８遺跡で試掘調査を行った。７件の試掘調査のうち１件で発掘調査、１件で設計変更を指導した。

鳥羽離宮跡及び竹田城跡の試掘調査（№20）では、竹田城跡の堀と推定される東西溝を確認したため、遺構の地中保存が図られた。調査の詳細は本書にて報告する。富ノ森城跡の試掘調査（№88）は、広域にわたる区画整理事業の一環であるが、その一部において、室町時代の堀跡を検出し

図６　土層断面の分層（北東から）

図７　試掘結果に基づく発掘調査（南から）

た。宮ノ森城跡ではこれまでの試掘調査の積み重ねによって遺跡範囲が大幅に修正されており、今回の調査成果もこれを追認するものである。遺構が発見された付近において発掘調査を指導した。

なお本書では、昨年度より継続協議中であった下鳥羽遺跡の発掘調査成果について報告する（令和４年度№92）[2]。

⑩長岡京地区（№22～24・90～92）

長岡京跡、鶏冠井清水遺跡、東土川遺跡の３遺跡で調査を行った。うち３件で発掘調査指導、１件で設計変更を指導している。

東土川遺跡（№22）の試掘調査では、弥生時代～鎌倉時代の遺構群から弥生時代中期後半と後期前半の遺物がまとまって出土した。この事案は遺構発見により工事計画が中断されたため本書にて報告したが、後に発掘調査が実施されることとなった。

長岡京期の遺構では、左京三条三坊九町（№23）で東三坊坊間東小路側溝の可能性がある溝を発見した。また左京一坊四条七町跡（№91）では、弥生～古墳時代の遺構とともに長岡京期のピットや溝を検出している。この２件については発掘調査を指導した。このほか、左京四条四坊三・四町跡（№92）では、中世の東西溝の発見により設計変更が行われた。

⑪南桂川地区（№25、93～97）

上久世遺跡、中久世遺跡、大藪遺跡、山田車塚古墳の４遺跡で調査を行った。上久世遺跡（№94）では、柱穴などを確認したため発掘調査を指導した。その南に位置する中久世遺跡（№95）では、弥生～長岡京期の遺構・遺物を凋密に確認したため同じく発掘調査を指導している。ともに今年度発掘調査が行われ、刮目すべき成果が得られている。

⑫京北地区(98)

愛宕山古墳群で調査を行った。

（黒須亜希子）

註

1）京都市情報館（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課HP）参照
https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/cmsfiles/contents/0000060/60710/youkou2021.pdf

2）京都市文化市民局「調査一覧」『京都市内遺跡試掘調査報告　令和４年度』 2023年

Ⅱ-1　平安京左京九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内（東寺旧境内）　№7

1　調査に至る経緯と経過

本件は、共同住宅建設に先立つ試掘調査である。周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京跡」と「教王護国寺旧境内」に該当する。調査地は左京九条一坊九町に該当し、平安時代から江戸時代にかけて、教王護国寺（以下「東寺」）の子院や関連諸施設が所在したと伝わる。

周辺では複数の調査が行われている（図8）。調査1ではGL-0.45mという比較的浅い深度で平安時代に遡る可能性のある整地土が確認されている[1]。調査2では、GL-0.5mで近代の整地土を確認している[2]。また調査3では、平安時代から近世に至る遺構が多数確認されており、東寺の子院や関連施設があった様子が明らかとなっている[3]。本調査では、東寺の関連施設に関わる遺構の検出が期待された。試掘調査は、令和5年2月9日に実施した。

図8　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構（図10）

基本層序は、GL-0.2mで近代包含層（2・3層）、-0.8mで時期不明整地土（9層）、-1.05mで地山（10層）に至る。このうち時期不明整地土上面で、複数の遺構を検出した。

溝2

調査区の中央で検出した。南北幅2.2m、東西1.05m以上を測る。完掘していないため深さは不明だが、0.3m以上ある。埋土の最上層は礫と炭化物を含む黒褐色粘性中砂で、近世の遺物とともに中世の瓦類が出土した。

柱穴7

調査区南端で検出した。平面楕円形で、南北0.65m、東西

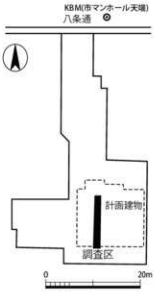


図9　調査区配置図（1：800）

0.35m以上、深さ0.3mを測る。埋土は黒色細砂の単層で、柱当たりは確認できなかった。底で上面が平らな自然石の根石を2石検出した。近世陶磁器の細片が出土している。

3　出土遺物（図11）

整地土や遺構から、遺物が出土している。ここでは、図化に耐えられた資料を抽出し報告する。ともに溝2から出土したものである。

1は平瓦である。凸面に格子状のタタキ目、凹面に布目を残す。中世頃の所産か。

2は有孔塼である。全体の50％程度が遺存しているものと思われる。長辺15.2㎝以上、短辺12.8㎝、最大厚5.3㎝を測る。胎土は緻密、焼成は良好である。表面は全体に縄タタキを施した後、中央を一方向から穿孔する。穿孔後、内面にナデとケズリを施す。穿孔した際の粘土の盛り上がりが残る。孔は穿孔開始面では径4.3㎝、反対面では径3.6㎝を測る。

4　まとめ

本調査では、検出した遺構は近世以降のものに限られるものの、遺構面が良好に遺存していることを確認した。溝2は幅2mを超える規模を持つ。その性

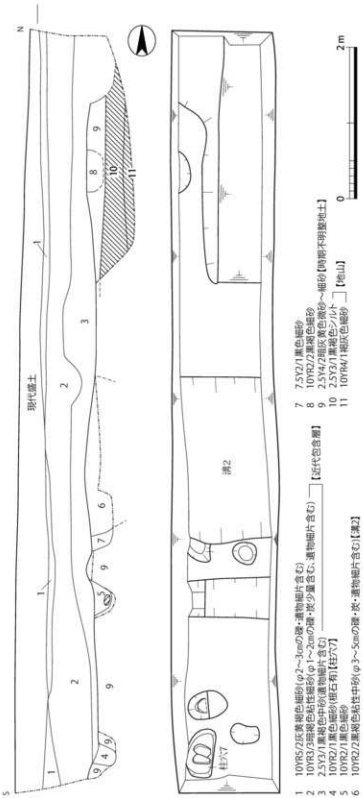


図10　調査区平・断面図（1：50）

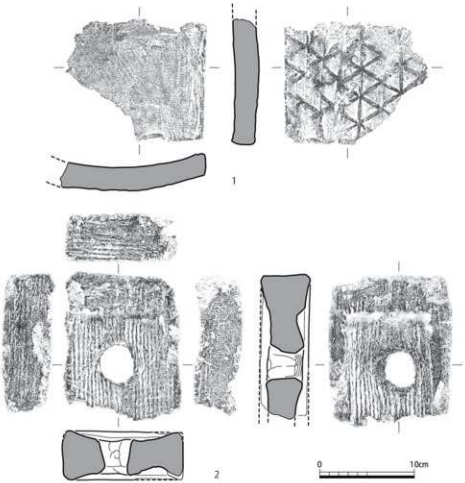


図11　溝２出土遺物実測図（1：4）

格は不明だが、何らかを区画する溝の可能性がある。また、中世頃の所産と考えられる遺物が出土していることから、近世以前から土地利用がなされていたことがわかる。周辺では平安時代の遺構が確認されており、東寺の周辺では人々が継続的に活動していた状況がうかがえ、これらは東寺の関連施設に伴う可能性も想定できる。今後の調査の進展に期待したい。

（佐藤　拓）

註

1）京都市文化市民局「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成30年度』 2019年

2）京都市文化市民局「Ⅱ-4　平安京左京九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内　№47（22H184）」『京都市内遺跡試掘調査報告　令和４年度』 2023年

3）（財）京都市埋蔵文化財研究所『東寺（教王護国寺）旧境内』、京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-7　2002年

Ⅱ-2　平安京右京七条一坊八町跡　№10・58

1　調査に至る経緯と経過

本件は、共同住宅建設に伴う試掘調査である。調査地は七本松通と花屋町通の交差点北東角付近に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京跡」に該当する。条坊は右京七条一坊八町にあたり、計画地西側に皇嘉門大路東築地心が想定される（図12）。

今計画地のうち、北半分では昭和58年に発掘調査が行われている[1]。この発掘調査では、皇嘉門大路東側溝と内溝、平安時代前期の建物跡が検出されている（図12調査１）。約60m南側で行われた発掘調査では、北東から南西方向に流れる弥生～古墳時代の流路と、皇嘉門大路東側溝・内溝が検出されている（調査２）[2]。

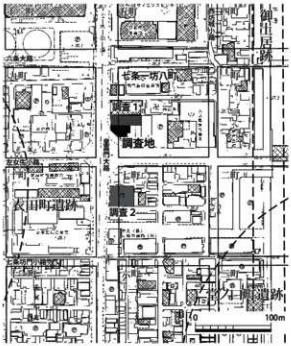


図12　調査位置図（1：5,000）

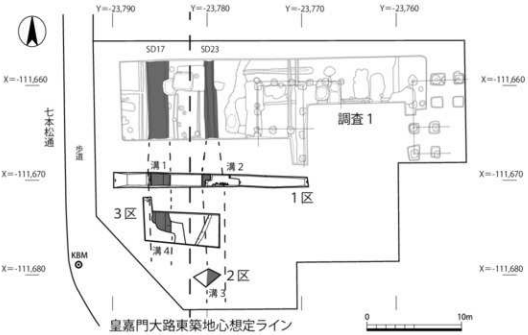


図13　調査区配置図（1：400）

両調査において、東側溝・内溝の埋土には平安時代前期の瓦が多量に含まれており、築地に葺かれたものが、崩れ落ちたものと考えられている。この原因としては、元慶４年（800）もしくは仁和３年（887）の地震が推定されている[2]。今調査では、計画地北側で確認された各遺構の延長部分の検出が予想された。

調査は令和５年１月10日に行った。調査区の大部分は現代撹乱により削平されていたが、一部で溝状の遺構（溝１～３）を検出した（１・２区）。この溝の実態を確認するため、同年６月12日～15日に追加調査を行った（３区）。

２　遺　構

（１）基本層序（図14）

敷地西側で良好に地層が遺存していた。１区西端では、現代盛土以下GL-0.1mで黒褐色泥砂の旧耕作土（１区２層）、-0.36mで黒褐色砂泥の地山（１区７層）に至る。ただし、３区東端と２区全体で旧流路を確認しており、敷地南東側は、旧流路の埋土である黄灰色粗砂や褐灰色粗砂が展開する。

なお、良好に地層が遺存していたのは２区と１・３区の西側に限られており、１・３区の東半は既存建物解体時の撹乱が地山以深に及んでおり、遺構・遺物は確認できなかった。

（２）遺　構

溝１

１区西側で検出した、南北方向の溝である。西肩が削平されているが、幅1.35m以上、深さ0.2m、南北長0.55m以上を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は大きく２層にわかれ、上層から黒褐色泥砂が0.15～0.2m、褐色粗砂が0.05m程度堆積する。褐色粗砂層上面で、平安時代前期の瓦が、特に東側で多

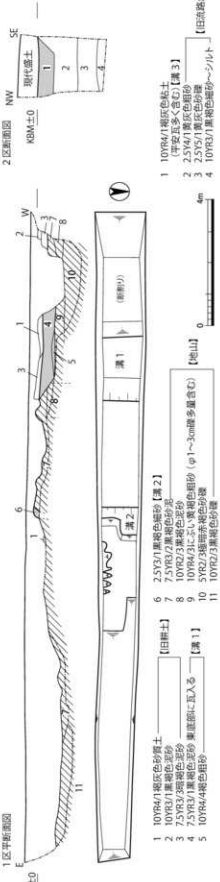


図14　１区平・断面、２区断面図（１：120）

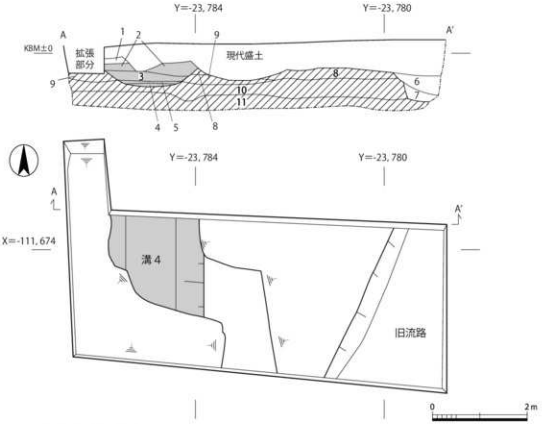


図15　３区平・断面図（１：80）

量に出土した。

溝２

１区中央付近で検出した、南北方向の溝である。幅0.4m以上、深さ0.1m以上、南北長0.6m以上を測る。埋土は黒褐色細砂の単層である。

溝３

２区で検出した、南北方向の溝である。東肩は調査区外に延びる。東西幅0.7m以上、深さ0.25mを測る。埋土は褐灰色粘土の単層で、平安時代前期の瓦が出土した。

図16　溝４検出状況（南から）

溝４

３区西側で検出した、南北方向の溝である。東西幅2.0m以上、深さ0.5m、南北長2.1m以上を測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。埋土は４層にわかれ、上層から褐灰色砂泥～シルトが0.15～0.3m、黒褐色中砂～粗砂が0.1～0.2m、褐灰色砂泥が0.05m、径１～２cmの礫含む暗赤褐

色粗砂が0.05m堆積する。褐灰色砂泥～シルト層中と、黒褐色中砂～粗砂層の上面では、平安時代前期の瓦が多量出土した。

（3）小　結

各調査区で、溝を検出した。このうち、溝１・４は同一線上に位置し、平安時代前期の瓦が出土していることから、同一遺構とみられる。溝２・３も同様に同一線上にあり、同一遺構の可能性が高い。溝２・３の中間にある３区では、これに対応する南北溝を確認できなかったものの、想定ライン付近ではGL-0.7m付近まで撹乱が及んでおり、既に削平されたものとみられる。

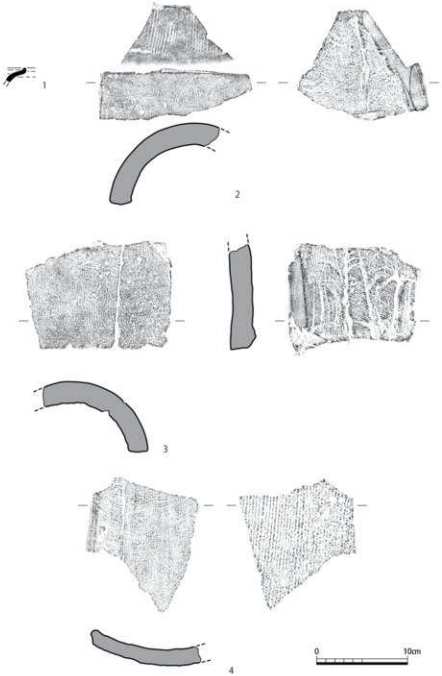


図17　溝４出土遺物実測図・拓影（1）（1：4）

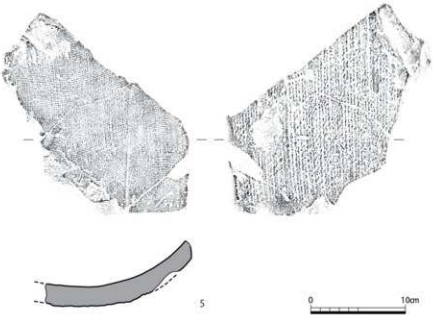


図18　溝4出土遺物実測図・拓影（2）（1：4）

3　遺　物（図17・18）

出土遺物の大半は、溝1・2・4から出土した瓦である。細片が多いが、図化に耐えられたものを抽出し、報告する。いずれも溝4から出土したものである。

1は土師器皿Aである。口縁部のみが残る。体部にナデを施した後、口縁端部を屈曲させるように再度ナデを施す。2・3は丸瓦である。2は玉縁部凸面は縄タタキを施した後、ナデを施す。体部凸面はナデで成形し、凹面には布目がのこる。側縁にはケズリを施す。3は凸面をナデで成形し、凹面に布目が残る。側縁にはケズリを施す。4・5は平瓦である。4・5ともに凸面に縄タタキ目、凹面に布目が残る。側縁にはケズリを施す。いずれも平安時代前期の所産とみられる。

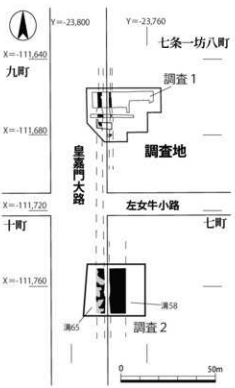


図19　周辺調査との遺構位置関係図
（1：2,000）

4　まとめ

今調査では、地山上面で複数の溝を確認した。溝1・4と溝2・3はそれぞれ同一遺構と考えられる。溝1・4の延長には調査1-SD17と調査2-溝65が、溝2・3の延長には調査1-SD23と調査2-溝58が位置する（図19）。また、調査1・2で確認した溝からは、平安時代前期の瓦が多量出土した。確認した瓦は全て丸・平瓦で、軒瓦は含まれていない。今調査でも瓦が多量に出土したが、軒瓦は一点も確認できなかった。調査2で出土した瓦は、築地塀が地震で倒壊したものが落ち込んだものと推測されているが、今調査の検出状況も周

辺調査の検出状況と同様であり、これらの遺構は同一遺構であると考えられる。

この２条の溝間には皇嘉門大路東築地心が推定されており、前者は皇嘉門大路東側溝に、後者は築地内溝に相当する可能性が極めて高い。今調査地においては、東側溝はY=-23,785付近に、内溝はY=-23,779付近に中心が求められる。今後の調査の進展に期待したい。

（佐藤　拓）

註

1）京都市文化観光局「Ⅲ　右京七条一坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和58年度』 1984年

2）（公財）京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京七条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-2　2016年

Ⅱ-3　史跡西寺跡、平安京右京九条一坊十一町跡、西寺跡、唐橋遺跡　№63

1　調査に至る経緯と経過

西寺は、平安京の造営とともに、東寺と朱雀大路を挟み東西対称となるように造営された官寺である。南は九条大路に面し、北は八条大路、東は皇嘉門大路、西は西大宮大路に限られる右京九条一坊九町から十六町の東西二町、南北四町を占める広大な寺域を有していた。主要な堂塔は、南半の四町域に所在し、九条大路に面して南大門を設け、中軸線上に南から中門、金堂、講堂、僧坊、食堂が並び、南西隅には塔が配されていた（図20）。

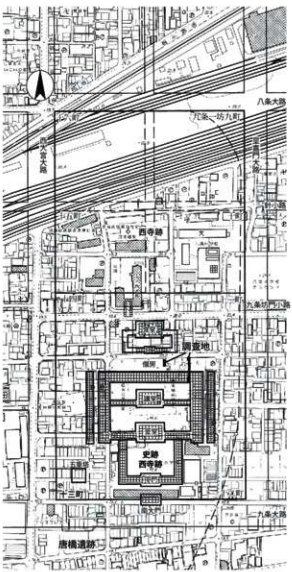


図20　調査位置図（1：5,000）

造営については、延暦16年（797）に藤原緒嗣が造西寺長官、笠江人が造西寺次官に任ぜられており、遷都直後から造営に着手していることがわかる[1]。金堂は弘仁3年（812）頃[2]、講堂は天長9年（832）に完成するが[3]、元慶6年（882）に五重塔の造営料の記事があり[4]、引き続き造営が進められていたことがわかる。

西寺は、東寺が弘仁14年（823）に空海に下賜された後も、怨霊会や国忌が執り行われ、僧綱所が置かれるなど、引き続き国家による管理が行われていた。しかし、正暦元年（990）の焼亡後は律令国家の衰退と共に衰亡したようで[5]、天福元年（1233）に塔が焼亡した際には、「本ヨリ荒廃ノ寺」と記されている[6]。塔焼亡後の西寺についての寺院活動を示す史料はなく、廃絶したと考えられる。

その後は田畑の中に講堂跡（コンド山）のみが高まりとして残され、大正10年（1921）に京都府下第一号となる国史蹟に指定された。また、昭和35年以降、西寺跡の発掘調査が進み、南大門、中門、金堂、僧坊、食堂が確認され[7]、東寺とほぼ東西対称の伽藍配置であったことが裏付けられたため、昭和41年には追加指定が行われた。さらに、平成29年以降の範囲確認調査の結果、塔跡

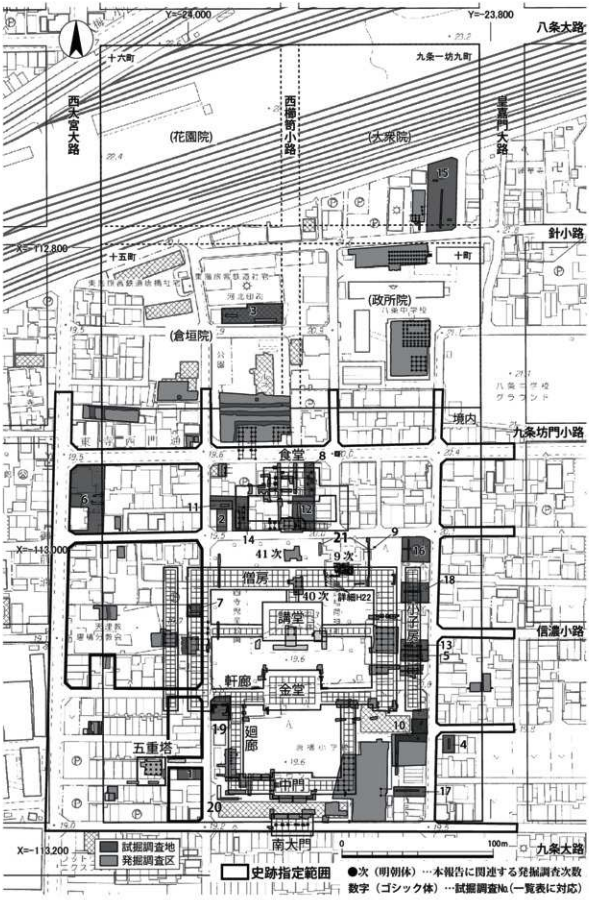


図21　西寺跡周辺調査位置図（1：2,500）

表２　西寺跡試掘調査一覧表

No.	推定地	住所	調査期間	調査組織	成果	文献資料
1	境内（十三町）	唐橋西寺町 7	1987/1/12	埋文研	平安時代前期整地層	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 昭和 62 年度』京都市文化観光局、1988 年
2	境内（十四町）	唐橋西寺町	1989/8/9	埋文研	平安時代整地層	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成元年度』京都市文化観光局、1990 年
3	倉知院（十五町）	唐橋門脇町 28	1992/10/5	埋文セ	時期不明の土坑１基、ピット２基	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成４年度』京都市文化観光局、1993 年
4	境内（十二町）	唐橋花園町 4-13	1994/10/24	埋文セ	顕著な遺構無し	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成６年度』京都市文化観光局、1995 年
5	東小子房（十二町）	唐橋西寺町 63	1995/11/17	埋文セ	東小子房基壇盛土、東西縁、礎石根固め１基、基壇東西幅 8.8m	「史跡西寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成７年度』京都市文化市民局、1996 年
6	西限築地（十四町）	唐橋西寺町 36	1997/6/12・13	埋文セ	西大宮大路東側溝、西限築地犬行	「史跡西寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成９年度』京都市文化市民局、1998 年
7	西僧坊（十四町）	唐橋西寺町 28-2	1997/7/16	埋文セ	西僧坊基壇盛土、小ピット２基	「史跡西寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成９年度』京都市文化市民局、1998 年
8	食堂（十一町）	唐橋西寺町 44	1999/6/14	保護課・埋文セ	食堂礎石抜取穴１基	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 11 年度』京都市文化市民局、2000 年
9	北僧坊（十一町）	唐橋西寺町 57（西寺児童公園）	2001/2/9	保護課・埋文セ	西寺整地層	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 13 年度』京都市文化市民局、2002 年
10	境内（十二町）	唐橋西寺町 65	2001/5/11	保護課・埋文セ	西寺期整地層、平安時代以前の流路	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 13 年度』京都市文化市民局、2002 年
11	食堂院（十四町）	唐橋西寺町 56-3	2001/7/30	保護課・埋文セ	西寺期整地層	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 13 年度』京都市文化市民局、2002 年
12	食堂院（十一町）	唐橋西寺町 52-53	2004/9/8	保護課	食堂院南門の礎石抜取穴２基、南門北縁、東回廊の抜取穴２基	「史跡西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 16 年度』京都市文化市民局、2005 年
13	東小子房（十二町）	唐橋西寺町 62	2008/1/23	保護課	東小子房基壇盛土及び土坑、溝	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 20 年度』京都市文化市民局、2009 年
14	食堂院（十四町）	唐橋西寺町 35-6	2008/3/26	保護課	食堂院西廻廊の礎石抜取穴３基	「史跡西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 20 年度』京都市文化市民局、2009 年
15	大衆院（九町）	唐橋門脇町 23	2012/3/2	保護課	掘立柱建物１棟、柱穴多数、弥生時代の溝	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 24 年度』京都市文化市民局、2013 年
16	境内（十一町）	唐橋門脇町 58-1	2014/1/21	保護課	西寺期整地層	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 26 年度』京都市文化市民局、2015 年
17	境内（十二町）	唐橋西寺町 67	2015/3/30	保護課	西寺期整地層、ピット１基	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 27 年度』京都市文化市民局、2016 年
18	東小子房（十一町）	唐橋西寺町 59	2016/5/26	保護課	東小子房基壇盛土、西縁雨落溝	「史跡西寺跡・平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 28 年度』京都市文化市民局、2017 年
19	西廻廊等（十三町）	唐橋西寺町 70	2019/4/26	保護課	西廻廊基壇西縁、金堂西軒廊基壇南縁、西僧房基壇東縁及び南縁	「史跡西寺跡・平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局、2020 年
20	西廻廊等（十三町）	唐橋西寺町 65	2023/8/21・22	保護課	西寺期整地層	「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和５年度』京都市文化市民局、2024 年
21	北僧坊（十一町）	唐橋西寺町 57（西寺児童公園）	2023/10/2 ～ 4	保護課	東西溝、落込み等	本報告

埋文研：(公財) 京都市埋蔵文化財研究所　埋文セ：京都市埋蔵文化財センター（2006 年に保護課と合併）　保護課：京都市文化市民局文化財保護課
※発掘調査の一覧については、『史跡 西寺跡発掘調査総括報告書』京都市文化市民局、2021 年　図３及び表６を参照のこと。

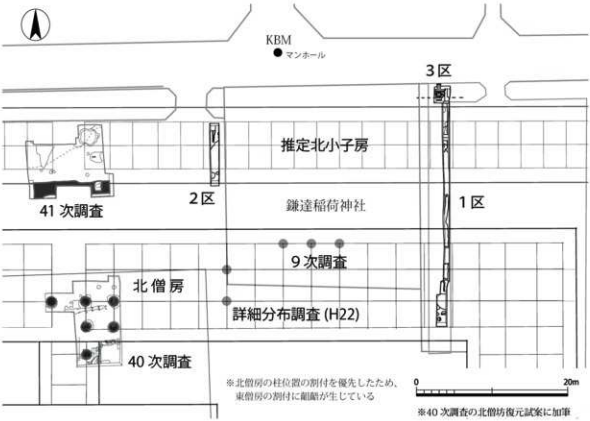


図22　調査区配置図（1：500）

の地業が確認され、塔も東寺とほぼ東西対称の位置に存在することが確認されたため、令和3年に追加指定が行われた。合わせて将来の保存活用計画策定に向け、平成30年より唐橋西寺公園を中心に範囲確認調査を実施し、令和2年には総括報告書を刊行した（以下、「総括報告」という）[8]。

今回の調査地は、講堂跡（コンド山）の土壇が残る唐橋西寺公園内の北東部に位置し、史跡西寺跡・平安京右京九条一坊十一町跡・唐橋遺跡に含まれている。西寺伽藍復元図では、北僧房の一部に該当する。ここに防球ネットの新設が計画され、令和5年8月3日付けで文化庁長官宛てに現状変更許可申請が提出され、9月15日付け5文庁第2667号で許可を受けたため、史跡の保全と土地活用の両立を図るための試掘調査を実施することとなった。

これまでの北僧房の発掘調査成果では、東西方向の礎石抜取穴3基、東西方向の瓦散布[9]（図22　9次）、梁行を示す礎石抜取穴2基（同　詳細分布調査報告（H22））[10]を確認しており、9次調査に基づき東寺北僧房の位置よりも北側に復元されていた。しかし、令和3年度の範囲確認調査（同　40次）で入側柱列3基、側柱列2基の計5基と南雨落溝が確認された[11]結果、北僧房の配置が約4m南側にずれることとなり、東寺北僧房とほぼ同位置となった。これにより北僧房と食堂院の間に、基壇幅約10mとされる北小子房を復元する余地が生じることとなった。一方、令和4年度の範囲確認調査（同　41次）では北小子房に伴う顕著な遺構は認められなかった[12]。したがって、今回は、北僧房と北小子房に関連する遺構の確認を主目的とした。調査は10月2～4日に実施し、推定北小子房の北側において東西方向の溝等を確認した。調査面積は計約48㎡である。なお、これらの遺構は協議の上、地中に保存されている。

2　遺　構（図22～26）

調査区は、防球ネットの計画位置に、南北方向に１・２区を設定した（図22）。その結果、ピット４基と落込みを確認した。また、１区北端で瓦が集中して出土する層を確認したことから、１区を西側に拡張したところ（図22　３区）、東西溝を２条検出した。

１区の基本層序は、GL-0.2mで褐灰色泥砂の旧耕土、-0.3mで褐色泥砂（礫混）、-0.9mで明褐色砂礫である（図24）。褐色泥砂以下は地山と考えられる。２区の基本層序は、GL-0.2mで褐灰色泥砂の旧耕土、-0.3mで明褐色砂礫である（図25）。明褐色砂礫層は、近隣事例（図22　41次調査）から古墳時代の流れ堆積の可能性が考えられる。３区の基本層序は、GL-0.5mで褐灰色泥砂の旧耕土、-0.6mで暗オリーブ褐色泥砂の整地層である。３区南端では、整地層と同じ面で礫敷きと考えられる層を一部検出した（図26）。

ピット１・２（図24）

１区地山（６層）上面で検出した。ピット１は直径約0.5mの円形で、深さは0.12mである。埋土はにぶい黄褐色泥砂である。ピット２は東西0.6m以上、南北0.5mの不定形で、深さは0.2mである。埋土は灰黄褐色泥砂である。遺物は確認できず、時期不明である。

ピット３・４（図25）

２区砂礫層（６層）上面で検出した。ピット３は南北0.8m、東西0.42m以上の円形で、埋土は暗灰黄色泥砂である。土師器小片と瓦が出土した。ピット４は直径約0.4mの円形で、埋土は灰黄褐色泥砂である。土師器小片と黒色土器の椀、瓦が出土したが、詳細な時期は不明である。

落込み５（図25）

２区砂礫層（６層）上面で検出した。南北3.1m以上、東西1.1m以上の不定形で、深さは0.25m以上の落込みである。埋土は２層に分けられ、上層が黄褐色泥砂、下層が灰黄褐色泥砂で土師器小片を含むが、時期不明である。

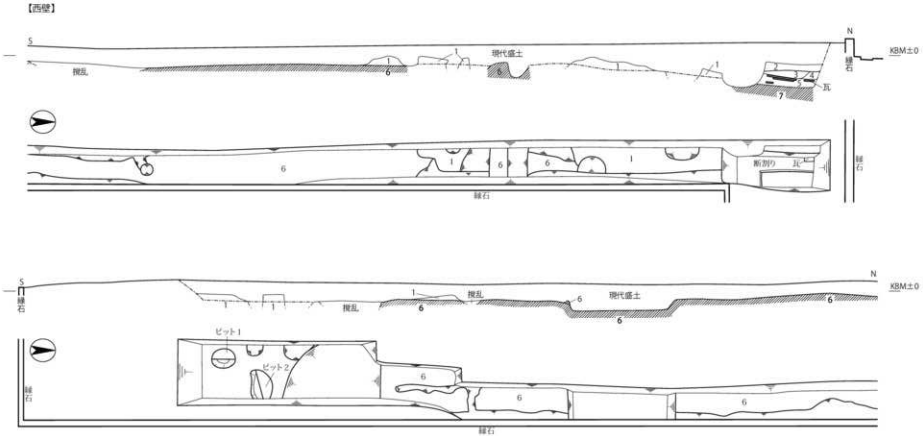
溝６（図26）

３区溝７上面で検出した、幅0.25～0.4m、深さ0.15m、検出長1.3mの東西溝である。埋土は暗灰黄色泥砂で礫と西寺期の瓦を多く含む。東西は調査区外に続く。

溝７（図26）

３区整地層（６層）上面で検出した。幅1.7m以上、深さ0.35m、検出長1.7mの東西溝である。北肩は調査区外にあると考えられる。東西は調査区外に続く。埋土は黒褐色粘質土で、西寺期の瓦を多く含む。軒平瓦が１点出土した[13]。

図23　３区溝検出状況（東から）



1　10YR5/1褐灰色泥砂(礫多く含む)
2　7.5YR4/1褐灰色泥砂【旧耕土】
3　2.5Y4/2暗灰黄色泥砂(礫・瓦多く含む)【溝６】
4　10YR5/1褐灰色粘質土【溝７】
5　10YR3/1黒褐色粘質土(瓦多量に含む)【溝７】
6　7.5YR4/3褐色泥砂(礫多く含む)【地山】
7　7.5YR5/6明褐色砂礫【地山】

ピット１　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
ピット２　10YR4/2灰黄褐色泥砂

0　2m

図24　１区平・断面図（１：80）

3　まとめ

今回の調査の結果、北僧房に伴う礎石抜取穴等は確認できなかったが、３区で整地層と礫敷き、西寺期の瓦を多く含む東西溝を２条検出した。東西溝は同じ位置を踏襲するように新旧あり、何らかの区画が設けられていた可能性がある。なお、40次調査の成果に基づく北僧坊復元試案[14] によると、今回検出した溝７の南肩は、推定北小子房の基壇北端から約1.2m北に位置する（図22）。

推定北小子房に位置する２区北側では、落込みを検出した[15] が時期不明であり、北小子房の存在が明確になるような直接的な遺構は確認できなかった。

北小子房の有無を含め、食堂院と北僧房の間の土地利用については、今後の課題として調査成果を蓄積し、検討していく必要があるだろう。

（熊谷　舞子）

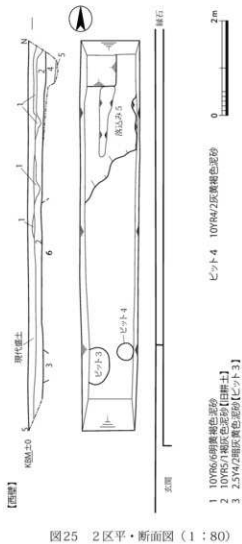


図25　２区平・断面図（１：80）

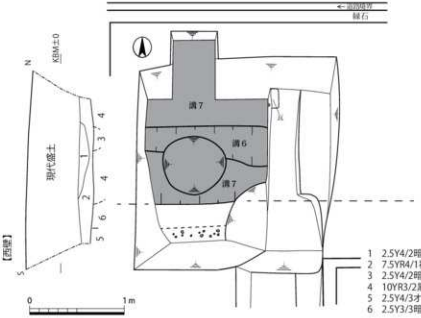


図26　３区平・断面図（１：40）

註

1）『続日本後紀』承和十年七月廿三日条。『日本紀略』延暦十六年四月四日条。

2）『日本後紀』弘仁四年一月十九日条。

3）『日本紀略』天長九年七月五日条。

4）『日本三代実録』元慶六年六月廿六日条。

5）『日本紀略』正暦元年二月二日条。

6）『明月記』天福元年十二月二十五日条。

7）杉山信三『史跡 西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所　1979年

8）西森正晃　ほか『史跡 西寺跡発掘調査総括報告書』京都市文化市民局　2021年

9）杉山信三『史跡 西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所　1979年

梶川敏夫「史跡 西寺跡―北僧房跡発掘調査概要―」『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅳ』京都市文化観光局文化財保護課　1975年

10）堀　大輔「平安京右京九条一坊十一町跡・史跡西寺跡（10HR325）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年度』京都市文化市民局　2011年

11）西森正晃「史跡西寺跡、西寺跡（40次）平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和４年度』京都市文化市民局　2023年

12）八軒かほり　ほか「史跡西寺跡、西寺跡（41次）平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和４年度』京都市文化市民局　2023年

13）註８の図版35、瓦25と同型式の均整唐草文軒平瓦である。なお瓦を中心とする遺物の取り上げは必要最低限に留め、残りは現地保存した。

14）註11の図17

15）２区西側で実施された41次調査でも、同様の砂礫層で成立する整地土（落込み）を確認している。

Ⅲ-1　北野天満宮　№70

1　調査に至る経緯と経過

本件は防災用の貯水施設建設に伴う試掘調査である。調査地は北野天満宮境内の北西端に位置し、周知の埋蔵文化財「北野天満宮」に該当する。境内での位置は北門の西側にあたるバックヤードで、物置やゴミ捨て場が集まる空閑地であった。

北野天満宮の西を限る史跡御土居の付近であるため、事前協議の上、史跡範囲から離して計画されたが、御土居と北門・参道に挟まれた限られた土地のため（図28）、建設可能な範囲は限られていた。旧状の確認も含めて令和５年10月19日に試掘調査を行った。

図27　調査位置図（1：5,000）

2　遺構（図29）

調査は計画範囲内に２箇所の調査区をいれて確認した。１区ではGL-0.2ｍまで現代表土、-1.0ｍまで近世から現代の陶磁器片・瓦片を多量に含む褐灰色泥砂、-1.2ｍまでにぶい黄褐色泥砂を確認した。掘削底で平面的に精査を行ったが遺構・遺物は確認できなかった。２区ではGL-0.2ｍまで表土、-1.3ｍまで近世から現代の陶磁器片・瓦片を多量に含む褐灰色泥砂、-1.3ｍ以下はにぶい黄橙色極細砂～シルトの地山であった。

近世から現代の陶磁器片や瓦片を含む地層は、どちらも掘方を確認できなかった。堆積状況からゴミが廃棄されてできた土が長い時間をかけて積みあがった状態と推測された。この状況はおそらく当該地全域に広がっていると考えられる。

このことから、当該地は御土居造成時には現在よりも１ｍほど低くなっていたが、近世から現代にかけて窪地にゴミを捨て続け、現在の高さまで埋まったものと推測された。御土居の裾を確認するために入れた２区ではGL-1.3ｍまでは廃棄物層、-1.3ｍで地山を検出したことから現在の史跡御土居裾は造営時のものと大きく変わっていないと考えられた。ただし地表面の高さについては天満宮側も現在より下がった位置であったと考えられる（図29）。なお、当該地は現在はゴミ捨て場などが整備されバックヤードとなっている。寺域内での空間利用についての事例を得た。

（赤松　佳奈）

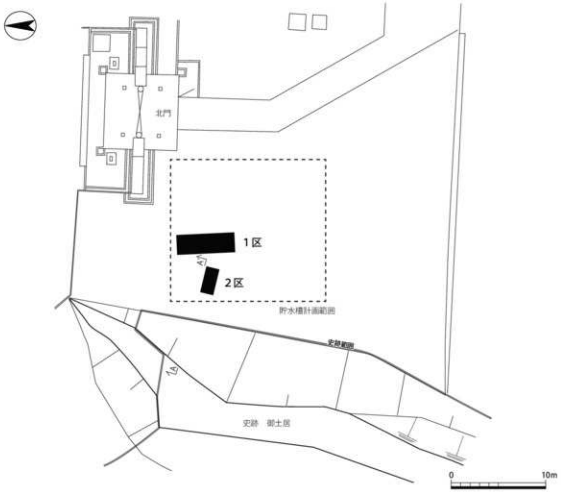


図28　調査区配置図（1：400）

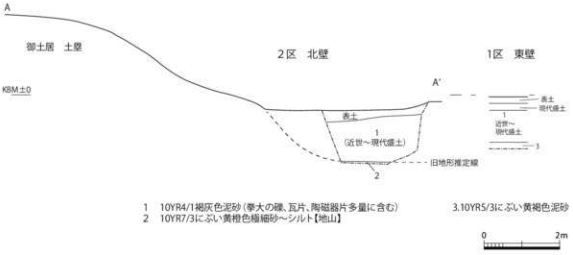


図29　1・2区断面図（1：100）

Ⅲ-2　山科本願寺跡（寺内町遺跡）　№78・79

1　調査に至る経緯と経過

本件は、共同住宅建設に伴う試掘調査である。調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地「山科本願寺跡（寺内町遺跡）」に該当し、主要堂舎が立ち並んでいたとされる「御本寺」推定地の南寄りにあたる（図30）。周辺では複数の発掘調査が行われており、今調査地の西隣接地で行われた第10次調査では、調査区の北側で東西方向に延びる堀８と、調査区中央付近で堀８から分岐し、東西方向にのびる堀７が検出されている[1]。また、今調査地から東に約100mの箇所で行われた第26次調査では、東西方向の堀10・70が検出されている[2]。今調査地は、この間に位置しており、これらの堀の延長部分の検出が予想された。

調査は令和５年４月11日に実施した。今計画は敷地内を２分し、それぞれ計画がなされているため、１箇所ずつ、計２箇所の調査区を設けた（図31）。

図30　調査位置図（1：5,000）

2　遺　跡（図32）

現地表面は、西側に設けた１区より、東側に設けた２区の方が0.4ｍほど高い。調査地は、調査直前まで耕作地として利用されており、GL-0.25～-0.5ｍ程度の耕作土が堆積している。１区の基本層序は、GL-0.25～-0.5mでにぶい黄褐色泥砂の近世以降整地土（１層）、-0.55～-0.6mでにぶい黄褐色砂泥・黄褐色砂泥の中世整地土（６・７層）、-1.1mで黒褐色泥砂の地山（８層）に至る。２区では、この耕作土を除去するとGL-0.3～-0.5mで明黄褐色泥砂や灰黄褐色泥砂などの

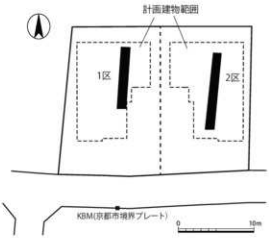


図31　調査区配置図（1：500）

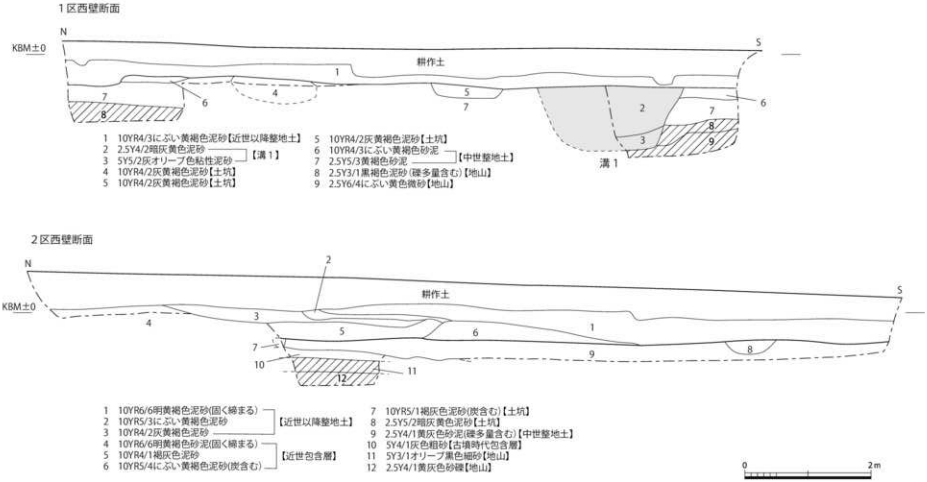


図32　各調査区西壁断面図（1：60）

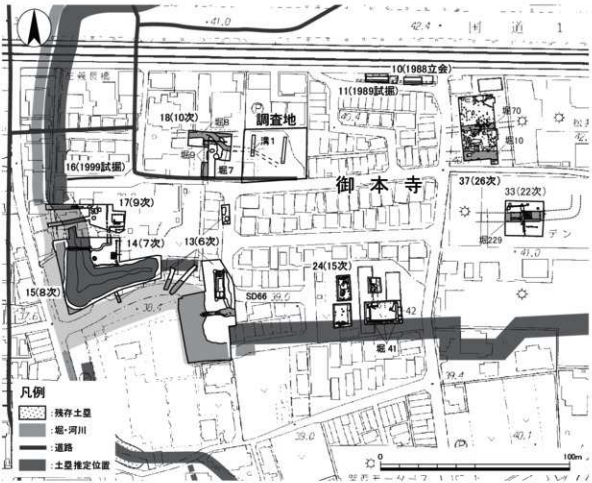


図33　周辺調査との遺構位置関係図（1：2,000）　註３文献掲載図を一部改変・転載

近世以降整地土（１～３層）、-0.5mで明黄褐色砂泥や褐灰色泥砂などの近世包含層（４～６層）-1.0ｍで黄灰色砂泥の中世整地土（９層）、-1.1～-1.2ｍで灰色粗砂の古墳時代包含層（10層）、-1.3ｍでオリーブ黒色細砂の地山（11層）に至る。１・２区とも中世整地土上面で、溝や柱穴等の遺構を検出した。

溝１

１区南端で検出した、北西から南東方向の溝である。幅1.8ｍ、深さ1.0ｍを測る。断面形は逆台形の可能性がある。埋土は大きく２層に分かれ、いずれの層からも中世とみられる遺物の細片が出土した。

３　まとめ（図33）

１区南端では溝１を検出したが、２区ではこの延長に相当する遺構を確認できなかったことから、２区以南に溝が位置すると考えられる。溝１の北西側には、第10次調査で確認されている堀７が位置することから、堀７の延長と考えられる。『山科本願寺発掘調査総括報告書』では、堀７と第26次調査で検出した堀70が、同一遺構である可能性が示されている[3]。しかし、今調査成果からは、南東方向に延びる堀７と堀70とを結ぶことはできず、第26次調査で確認されている堀

10、あるいは第22次調査で検出した堀229[4]とつながる可能性がある。今後の調査の進展に期待したい。

なお、協議の結果、計画建物の設計は変更され、遺跡は地中保存されている。

（佐藤　拓）

註

1）小檜山一良「Ⅳ　山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局、2006年。

2）公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所『山科本願寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-6、2022年。

3）京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課『山科本願寺跡発掘調査総括報告書』京都市文化市民局、2022年。

4）株式会社イビソク関西支店『山科本願寺跡・左義長町遺跡』イビソク京都市内遺跡調査報告第14冊、2017年。

Ⅲ-3　鳥羽離宮跡、竹田城跡、鳥羽遺跡　№20

1　調査に至る経緯と経過

本件は、共同住宅建設に伴う試掘調査である。周知の埋蔵文化財包蔵地である「鳥羽離宮跡」、「竹田城跡」、「鳥羽遺跡」に該当する。

今調査地は、新油小路通建設に先立ち行われた第35次調査A区の東隣接地にあたる。この調査では、平安時代末期から鎌倉時代の道路と南北側溝（SD20・21）、室町時代の堀状遺構（SD11）をはじめとした、平安時代～近世にかけての遺構を検出している[1]。第35次調査の西隣接地で行われた第54次B調査においても、堀状遺構の延長が確認されている[2]。また、竹田城の復元案では郭Ⅰの南東隅にあたり[3]、前述の溝の延長や、竹田城関連遺構の展開が予想された。

図34　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構

調査区は、計画建物範囲内に南北方向に設けた（図35）。基本層序は、現代盛土以下GL-0.3mで旧耕作土（5層）、-0.5mで暗灰黄色砂泥の中世整地土（8層）、-0.7mで褐灰色砂泥の時期不明整地土（11層）、-1.2mで灰色砂礫の基盤層（13層）に至る（図36）。調査区の南半では暗灰黄色砂泥層上面で、北半では褐灰色砂泥層上面で検出を行った。

溝5

調査区の北端で検出した、東西方向に延びる溝である。褐灰色砂泥層（11層）を切り込んで成立する。南北幅1.8m、検出長1.25m、深さ0.45mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土

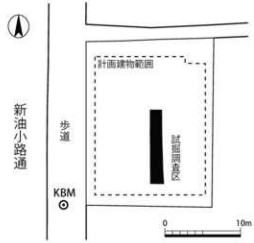


図35　調査区配置図（1：500）

はシルトブロックを含む黄灰色砂礫の単層で、鎌倉時代の遺物が出土した。

溝4

調査区の中央で検出した、東西方向に延びる溝である。暗灰黄色砂泥層を切り込んで成立する。南北幅3.2m、検出長1.3m、完掘していないが、深さは0.35m以上ある。埋土の最上層は拳大の礫を多量に含む灰黄色シルト混じり粗砂で、中世の所産とみられる土師器細片が出土した。

3　遺　物（図37）

中世整地土や、溝４・５などから遺物が出土した。しかし、その多くは細片であり、図化に耐えられなかった。ここでは、図化に耐えられたものを抽出し、報告する。

１は白磁四耳壺である。底部のみ残る。底径8.25㎝を測る。内外面は施釉されているが、脚部は露胎する。底部外面には、煤が付着する。底厚が3.0㎝と厚いことや、底径が小型化していることから、13世紀ごろの所産とみられる。溝５から出土した。

4　まとめ

今調査では、時期の異なる溝を２条検出した。

溝５は、第35次調査A区で検出したSD20の延長線上に位置す

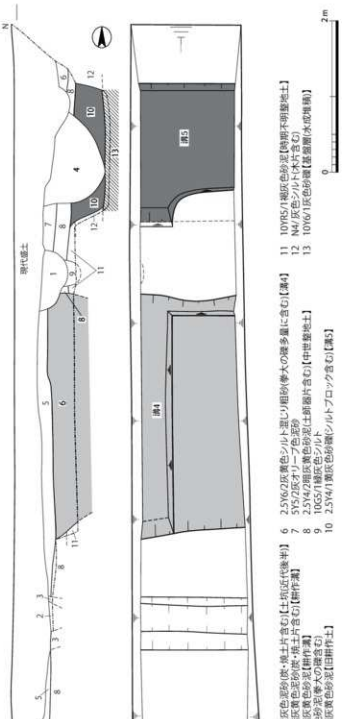


図36　調査区平・断面図（１：50）

図37　出土遺物実測図（１：４）

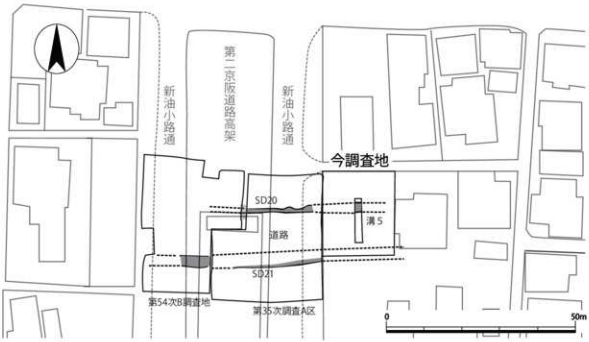


図38　竹田城築城以前遺構位置図（1：1,000）

る。SD20は東西方向に走る道路の北側溝と考えられている。ただ、SD20は幅約1.0mと報告されているのに対し、溝5は1.8mを測る。幅が大きく異なる理由は不明だが、その位置関係から同一遺構として理解しておきたい（図38）。

また、第35次調査A区では、SD20・21の間には盛土がされていると報告されている。路面を構成するものと思われるが、今調査で確認した11層は、溝5以北では確認していない。これが路面に相当する可能性がある。

中世の整地土を切り込んで成立する溝4は、出土遺物の時期や規模を勘案すると、竹田城の堀に該当する可能性が高い。しかし、西隣接地の第35次調査A区で検出したSD11の延長線上から約10m北に位置しており、Ⅱ区の外周を巡る堀と同様に郭の南東部が屈曲している可能性がある。

令和元年度に行われた試掘調査[4]を含めた近年の調査成果をもとに竹田城の堀の復元案

図39　竹田城堀復原図（1：2,500）
註3文献掲載図を一部加工・修正

を提示する（図39）。複数の郭で構成される竹田城の実態解明には、さらなる調査が必要であろう。今後の調査成果を注視したい。

なお、協議の結果、計画建物の設計は変更され、遺跡は地中保存されている。

（佐藤　拓）

註

1）上村和直「36　鳥羽離宮跡第35次調査」『昭和52年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2011年。

2）上村和直「46　鳥羽離宮跡第54-B次調査」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2012年。

3）中居和志「119　竹田城跡」『京都府中世城館調査報告』第3冊　―山城編1―』京都府教育委員会、2014年。

4）新田和央「Ⅳ-5　鳥羽離宮跡・竹田城跡・鳥羽遺跡　№33（18T561）」『京都市内遺跡試掘調査報告令和元年度』京都市文化市民局、2020年。

Ⅲ-4　下鳥羽遺跡（令和４年№92）

1　調査に至る経緯と経過

本件は宅地造成に伴う試掘調査である。調査地は伏見区下鳥羽北ノ口町で、周知の埋蔵文化財包蔵地「下鳥羽遺跡」に該当する（図40）。今回は遺構の遺存状況を把握した後で建物計画を進めるという意向があったため、事前協議を行い、試掘調査は敷地全体を対象に行った。

調査は令和４年11月17・18日に実施した。調査区は南北方向に２箇所設け、掘削面積は96㎡である（図41）。調査の結果、両調査区内全体に下鳥羽遺跡に関する遺構が広がっていることを確認した。今回の調査結果を踏まえて、申請者と現在協議中であり、協議が長引いたことから今年度報告する。

下鳥羽遺跡は低湿地に立地する弥生～平安時代の複合遺跡である。

周辺調査では、調査１で、弥生～古墳時代の竪穴建物などが確認され、方形周溝墓や土坑墓なども確認されている[1]。調査２では、弥生～古墳時代の竪穴建物状の遺構や溝状遺構が確認されている[2]。調査３では、弥生時代と古墳時代の溝が多数確認されており、方形周溝墓の可能性も考えられている[3]。調査４では、弥生～古墳時代の竪穴建物などが確認されている[4]。調査５では、遺物包含層と遺跡の西側を限る流路などを確認している[5]。調査６では、弥生～古墳時代の竪穴建物などが確認されている。また、方形周溝墓や土坑墓なども確認されている[6]。

図40　調査位置図（1：5,000）

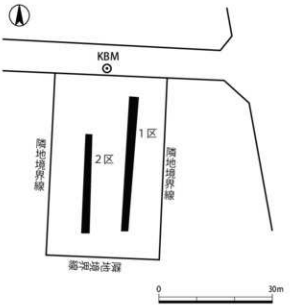


図41　調査区配置図（1：1,000）

以上、今回の対象地周辺では下鳥羽遺跡に関連する遺構が多数確認されている。

2　層序と遺構（図42・43）

層序は、現代耕作土以下、GL-0.2mで黒褐色粘質土含む細砂の平安時代の整地層（図42-1層）、-0.25mで黒褐色泥砂の弥生時代～古墳時代の整地層（図42-2層）、-0.36mで褐色粘質土～シルトの地山（図42-9層）となる。遺構検出は1区では平安時代の整地層上面で行い、2区では地山上面で実施した。

（1）1区

平安時代の整地層が良好に遺存していたため上面で遺構検出をしたが、平安時代に関連する遺構は確認できなかった。しかし、下層の確認のため部分的に断割りを行った結果、地山上面で土坑を2基、溝を1条、ピットを11基確認した。

土坑1

調査区南端で確認した。南北1.4m、深さ0.2mの土坑である。埋土は黒褐色泥砂である。

土坑2

調査区北端で確認した。南北0.8m、深さ0.14mの土坑である。埋土は黒褐色泥砂である。

溝3

北側付近の断割箇所で検出した。幅0.4m、深さ0.3mで東西方向の溝である。埋土は黒褐色泥砂である。

ピット群

径0.12～0.44mで深さは0.08～0.24mである。埋土は全て黒褐色泥砂である。

（2）2区

地山上面で土坑を4基、溝を3条、ピットを9基確認した。

土坑1

中央付近で検出した。東西0.6m以上、南北0.4mの土坑である。深さは0.1mである。埋土は全て黒褐色泥砂～粘質土である。

土坑2

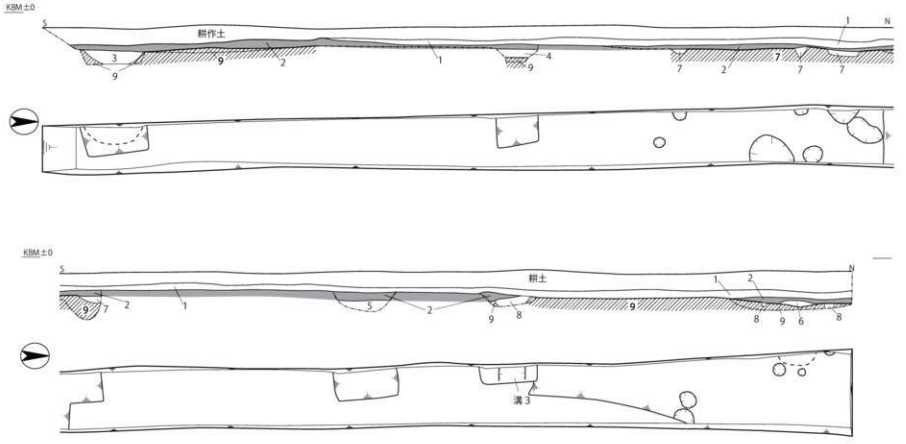
中央付近で検出した。東西0.7m以上、南北1.0mの土坑である。深さは0.16mである。埋土は全て黒褐色泥砂～粘質土である。

土坑3

中央付近で検出した。東西1.1m以上、南北0.7mの土坑である。深さは0.12mである。埋土は全て黒褐色泥砂～粘質土である。

土坑4

南側付近で検出した。東西0.5m以上、南北0.3mの土坑である。深さは掘削はしていないものの、土坑1～3の深さと合わせて考えると0.1～0.15mと予想される。埋土は全て黒褐色泥砂～粘質土



1　10YR3/1黒褐色粘質土含む細砂【平安時代の整地層】
2　10YR3/2黒褐色泥砂【弥生～古墳時代の整地層】
3　10YR3/1黒褐色泥砂【土坑１】
4　10YR3/1黒褐色泥砂【土坑状埋土】
5　10YR3/1黒褐色泥砂【土坑状埋土】
6　10YR3/2黒褐色泥砂【土坑２】
7　10YR3/1黒褐色泥砂【ピット】
8　10YR3/2黒褐色泥砂【溝３】
9　10YR4/6褐色粘質土～シルト【地山】

0　2m

図42　１区平・断面図（1：80）

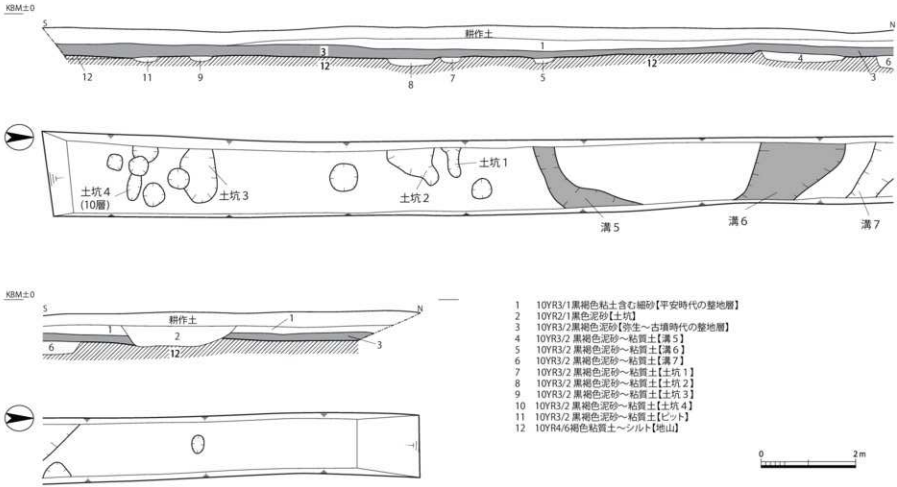


図43　２区平・断面図（1：80）

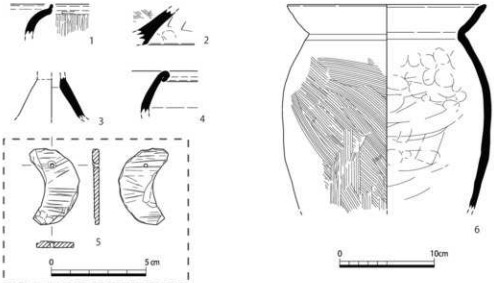


図44　出土遺物実測図（1：4、5のみ1：2）

である。

溝5

中央付近で検出した。幅は0.48ｍで、深さは0.24ｍである。東西方向から北東方向へ屈曲する。埋土は黒褐色泥砂～粘質土である。

溝6

中央付近で検出した。幅は西側で1.8ｍ、東側で1.2ｍとなる。北西から南東方向の溝で、南肩が調査区東端で屈曲する。深さは0.22ｍである。埋土は黒褐色泥砂～粘質土である。深さや埋土の状況から溝1と一連の溝の可能性が考えられる。

溝7

北側付近で検出した。幅0.64～1.2ｍ、深さ0.32ｍである。埋土は黒褐色泥砂～粘質土の単層である。

ピット群

径0.4ｍ～0.6ｍで、深さは0.12～0.15ｍである。埋土は全て黒褐色泥砂～粘質土である。

3　遺　物（図44）

遺物は1～5は平安時代の整地層上面の検出中に、6は重機掘削中に出土した。遺物はすべて1区から出土した。出土した遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石製品である。

1は弥生土器の口縁部である。口縁が上方に立ち上がり受け口状を呈しており、口縁端部は丸くおさめる。外面はミガキを施す。2は弥生土器の底部である。外面にわずかにハケ目が残り、ユビオサエを施す。内面はハケ目を施す。3は土師器の高杯の脚部である。外面にナデを施す。4は須恵器の壺の口縁部である。口縁部は外反し、端部は玉縁状となる。

5は滑石製の勾玉模造品である。縦4.0㎝、横1.9㎝、扁平な形状で厚みは0.3㎝である。中央に

孔をあけており、孔径は0.2㎝である。6は土師器の甕である。口縁端部は上方につまみ上げられ、端面が外傾する。外面は全体的にハケ目を施し、内面はユビオサエを施す。

4　まとめ

今回の調査で、古墳時代から弥生時代の遺構を確認した。特に2区で確認した溝5と溝6については、屈曲していることや埋土が同じであることから、一連の溝の可能性が考えられる。形状や周辺の調査事例を合わせて考えると方形周溝墓の可能性も考えられる。

周辺では本調査地北東側の調査1・2・4で竪穴建物を確認しており、調査1・3では方形周溝墓などが確認されていることから、北東側で住居や墓域が展開していることが分かる。一方で西側の調査5では竪穴建物や方形周溝墓は確認されていない。

本調査地は住居跡や墓域が確認されていない南西側に位置するが、今回確認した溝5・溝6は方形周溝墓となる可能性が高いことを考えると、墓域の範囲が現在の場所まで広がると考えられる。

今後、南西側の調査事例が増加することで下鳥羽遺跡の様相が明らかとなることを期待したい。

（清水　早織）

註

1）「33下鳥羽遺跡」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年。（87S622）

2）『京都市内遺跡試掘調査概報　平成9年度』一覧表82　京都市文化市民局　1997年。（97S033）

3）「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成10年度』京都市文化市民局　1999年。（98S288）

4）「Ⅲ-5　下鳥羽遺跡　No.92」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成16年度』京都市文化市民局　2005年。（04S196

5）「Ⅴ-6　下鳥羽遺跡2　No.22・90」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局　2006年。（04S619）

6）「Ⅴ-5　下鳥羽遺跡1　No.89」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局　2006年。（05S260）

Ⅲ-5　長岡京左京一条四坊三・四町跡、一条条間南小路跡、東土川遺跡　№22

1　調査に至る経緯と経過

調査地は、西羽束師川と府道202号の交差点より南東に位置する。長岡京の復元では左京一条四坊三町及び四町と、その間を東西に通る一条条間南小路に相当する。また、弥生時代中期の集落として著名な東土川遺跡にも含まれる。今回、この区画で地中障害検査のための掘削が計画されたため、検査に先立ち、埋蔵文化財の試掘調査を実施することとなった。

調査地周辺ではこれまでにも試掘調査、発掘調査、詳細分布調査が複数回行われており、弥生時代、長岡京期、中世の遺構面が重層的に確認されている。調査地より西へ30m隔てた区画で行われた試掘調査では、GL-0.9mで地山が確認されており、その上面で弥生時代の竪穴建物、溝、土坑、中世の土坑が検出された（図45調査１）。また、調査地より南東へ100m隔てた調査２では、平成18年度の試掘調査において弥生時代後期の竪穴建物や溝が検出されている。このほか、調査３・４でも弥生時代中期後半～後期の遺構群が確認されており、それぞれ発掘調査による記録保存もしくは設計変更による現地保存の対応がとられている。以上のことから、今回の調査地においても連続する遺構面の存在が予測された。

調査は令和５年３月３日に実施した。その結果、GL-0.3～-1.2ｍの深度において、弥生時代中期～鎌倉時代の遺構面を確認した。これを受けて当初の検査計画は一時中止となり、改めて建設計画が検討されることとなった。

図45　調査位置図（１：5,000）

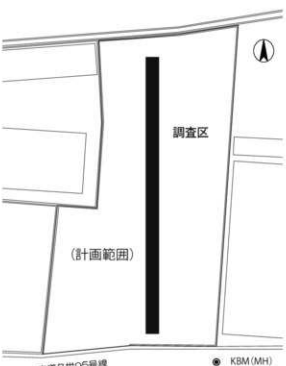


図46　調査区位置図（１：600）

2　遺構と遺物

調査区は、敷地のほぼ中央に南北方向に長く設定した（図46）。南から掘削を始めたところ、GL-0.2mまで現代耕作土、-0.4mまで黒褐色微砂混じりシルトの中近世包含層があり、これを除去した段階でオリーブ褐色微砂混じり粘土質シルトを主体とする地山を確認した。

地山面は北へ向かって徐々に下がり、調査区中央部付近では、中近世耕作土と地山の間に弥生時代、長岡京期、鎌倉時代の各包含層を介在させる。堆積層序は、GL-0.4mまで現代耕作土、-0.6mまで中近世包含層、-0.7mまで褐灰色細砂混じりシルトの中世包含層、-0.85mまでオリーブ黒色微砂混じり粘土質シルトを主体とする鎌倉時代包含層、-1.05mまで灰色微砂混じり粘土質シルト、-1.2mまでオリーブ黒色微砂混じり粘土質シルトの弥生時代包含層で、その直下が地山である。

調査区南半部では地山上面において遺構面の検出を行い、弥生時代中期の土坑、溝、長岡京期の溝、鎌倉時代の溝を確認した。一方、北半部では鎌倉時代包含層の上面において遺物が集中する箇所を認めたため、その上面までの掘削に止めた。北半部では、鎌倉時代の落込み、土器溜まりを検出した。

溝1

調査区南辺で検出した溝状遺構である。検出長1.6m、最大幅0.3m、南を背にして弧状に曲がる。埋土は黒褐色微砂混じりシルトで炭化物を多く含む。削平のため残存深度は0.1mと浅いが、竪穴建物の壁溝となる可能性がある。肩部より弥生土器高杯の脚部（図48-2）が出土した。

土坑4

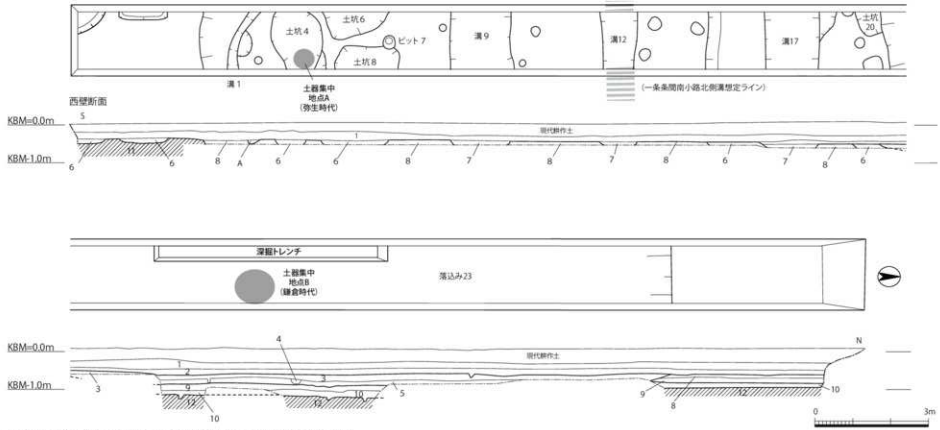
調査区南辺で検出した土坑である。南北長1.3m、東西幅1.5m以上を測る不定形土坑で、埋土は黒褐色微砂混じりシルトを主体とする。遺構内から弥生土器の甕、櫛描文を付す壺の体部、水差形土器の把手が出土した（図47土器集中地点A）。いずれも弥生時代中期後半の製品である。

溝9

調査区南半部で検出した溝状遺構である。検出長1.5m、最大幅1.0m、最大深度は0.1m以上を測る。東西方向に伸びており、埋土は中近世の耕作土に似る。しかし、埋土に弥生土器を多く含むことから、その性格づけには検討を要する。埋土から弥生土器甕（図48-1・3）が複数点出土した。いずれも弥生時代中期前半の製品である。

落込み23

調査区北半部において、南北約16.7mの範囲に渡って落込む。上層からは瓦器椀と土師器皿が集中して出土した（図47土器集中地点B）。完形品が多く、一部に使用痕跡が認められる（図48-4～8）。瓦器椀はいずれも楠葉型の製品で、12世紀末～13世紀初頭の所産と見られる。外面には指ナデと指オサエ、内面にはミガキを施しており、見込みには連結輪状暗文を付す。図48-5は使用による内面の摩滅が著しい。図48-6は、高台内部に擦痕を残す。図48-7は内面に煤が広く付着しており、食器以外の用途が想起される。なお、下層の弥生時代包含層は暗色化が顕著で、足跡状の潜り込みが認められることから、水田耕作土の可能性がある。



1）2.5Y3/2　黒褐色微砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　土器片入る（中近世包含層）
2）10YR4/1　褐灰色細砂混じりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　マンガン粒入る　しまり悪い　やや軟質（中世包含層）
3）2.5Y4/1　黄灰色細砂混じり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　土器片入る　マンガン粒多量入る　やや軟質
　ややしまり悪い（落込み23）
4）5Y4/1　灰色微砂混じり粘土質シルト　径0.5cm未満の礫少量入る　マンガン粒入る　土器片入る　しまり悪い　軟質
　（鎌倉時代遺構埋土）
5）5Y3/1　オリーブ黒色微砂混じり粘土質シルト　マンガン粒多量入る　木片入る　鉄班沈着　軟質　ややしまり悪い
　（鎌倉時代包含層・13世紀）
6）2.5Y3/2　黒褐色微砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　土器片入る　ややしまり悪い（弥生時代遺構埋土）
7）2.5Y4/3　オリーブ褐色細砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　マンガン粒入る　炭化物入る　ややしまり悪い
8）2.5Y4/1　黄灰色シルトブロックと地山ブロックの混合層　径1cm未満の礫少量入る　マンガン粒入る　ややしまり悪い
　（弥生時代整地土）
9）5Y4/1　灰色微砂混じり粘土質シルト　径0.5cm未満の礫少量入る　木片入る　鉄分沈着　やや軟質　弱い暗色化あり
　ややしまり悪い
10）10Y3/1　オリーブ黒色微砂混じり粘土質シルト　暗色化あり　偶蹄類の足跡あり　軟質（弥生時代包含層）
11）5GY4/1　暗オリーブ灰色微砂混じり粘土　軟質（地山）
12）2.5Y4/4　オリーブ褐色微砂混じり粘土質シルトに　2.5Y4/1　黄灰色シルト網目状に入る　乾痕あり　マンガン粒入る
　しまり良い（地山）
A）2.5Y3/2　黒褐色微砂混じりシルト　炭化物多量入る　ややしまり悪い（溝1）

図47　調査区平・断面図（1：100）

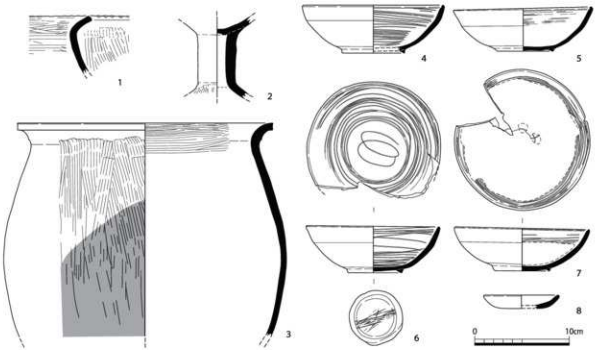


図48　出土遺物実測図（1：4）

3　まとめ

以上、長岡京跡及び東土川遺跡の試掘調査成果を報告した。今回の調査ではこれまで周辺において報告されてきた弥生時代の集落に係る遺構のほか、鎌倉時代の遺物が多数出土した。当該時期の遺構は図45調査1や調査5でも確認されているが、これまであまり重視されていない。調査地の西には西岡衆の城と目される東土川城が存在しており、これとの関連が注目されるところである。今後の調査成果の集積に期待したい。また、今回検出した遺構のうち、東西溝である溝12は長岡京一条条間南小路の北側溝推定地に該当する。周辺では長岡京期の遺構は希薄であるものの、その可能性がある遺構として付記しておきたい。

（黒須亜希子）

引用文献

調査1：京都市文化市民局　「Ⅴ-7　長岡京左京一条三坊十三町跡・東土川遺跡　No.84」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成21年度』 2010年

調査2：京都市文化市民局　「Ⅴ-7　長岡京左京一条四坊四・五町跡・東土川遺跡　No.112」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成18年度』 2007年

調査3：京都市文化市民局　「Ⅴ-9　長岡京左京一条四坊五町跡・東土川遺跡　No.121」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成24年度』 2013年

調査4：(株) 文化財サービス　『長岡京左京一条四坊五町跡・東土川遺跡　発掘調報告書』 2024年

調査5：京都市文化市民局　「Ⅴ-11　長岡京左京一条四坊三・四町跡・東土川遺跡（19NG682）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和2年度』 2021年

Ⅲ-6　大藪遺跡　№25

1　調査に至る経緯と経過

調査地は、国道171号と吉祥院久世線の交差点より南に位置する。弥生時代～平安時代の集落として周知されている大藪遺跡の縁辺に相当し、対象地の南西部は遺跡の範囲外となる。今回、この区画の東半部に店舗の新築が計画されたため、試掘調査を実施した。

大藪遺跡では、1972年以後、発掘調査が重ねて行われている。特に弥生時代後期遺構群の発見が顕著で、竪穴建物、掘立柱建物、方形周溝墓等の良好な残存が報告されている。1997～1999年度に行われた大藪街路建設に伴う発掘調査（図49調査1）では、一辺10mを超える大型の竪穴建物が検出され、ガラス製の勾玉等、希少な遺物が出土した。また、調査地より170m東の地点で行われた調査（同2）では、京都府内では最大級とされる大型の独立棟持柱建物跡が発見された。その西隣で実施された詳細分布調査（同3）でも竪穴建物が確認されており、この付近が当該期の集

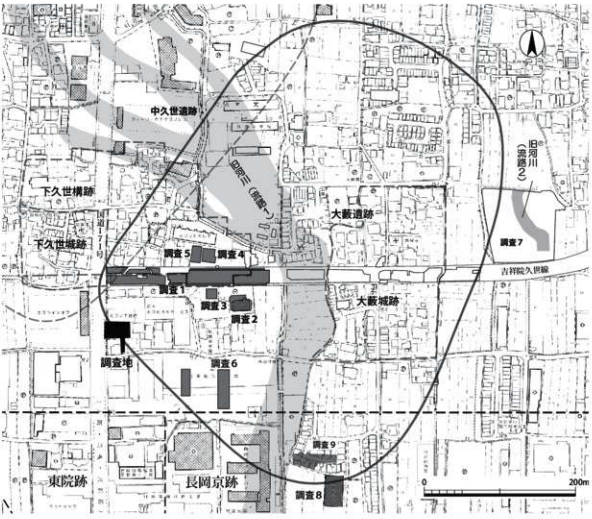


図49　調査位置図（1：5,000）

落の中心と目されている。

一方、集落の縁辺については、いまだ不確定なところが多い。令和元年度の詳細分布調査（同７）では、遺跡の東端に旧河川（図49流路２）があり、これ以東では遺物の出土が極端に減少することから、ここを集落の東限と推定した[1]。しかし遺跡南東や南辺の調査（同６～８）では弥生時代～古墳時代の竪穴建物が包蔵地外へと連続しており、居住域がより南へ拡大する様相をみせる。また、今回の調査地に近い調査１の西辺や、調査４・５では方形周溝墓や区画溝が検出されており、居住域の周囲に墓域が形成されていたと考えられる。

以上のことから、今回の調査地は包蔵地の縁辺ではあるものの、遺構が連続する可能性があった。試掘調査は、令和５年２月27日に実施した。調査の結果、GL-1.95mの深度において弥生時代後期の遺構面を検出した。これに基づき事業者と協議を重ねた結果、建物の設計変更により遺構面は概ね保存されることとなった。

２　調査成果

（１）基本層序

調査地は、北から南へ向かって緩やかに下がる傾斜面を、国道のレベルに合わせて大幅に盛土し、雛壇状に整形している。調査区は、盛土が比較的浅いと考えられる計画建物範囲の西半部に設定した（図50）。

南寄りに設定した１区では、GL-1.25mまで現代盛土、-1.25～-1.7mまで中近世耕作土、-1.9mまでオリーブ黒色粗砂～細砂混じりシルトの洪水砂の堆積を確認した。しかしこの段階で掘削限界に達したため、改めて北側に２区を設定することとした。

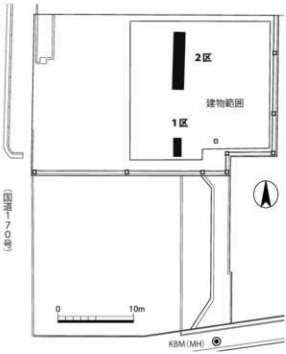


図50　調査区配置図（1：500）

図51　２区全景（南西から）

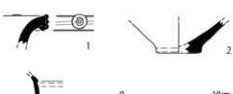
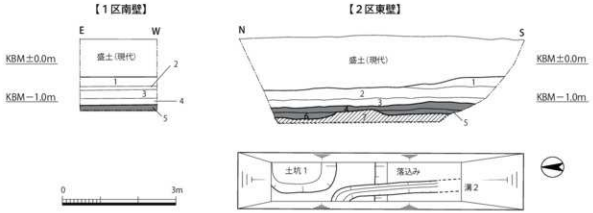


図52　出土遺物実測図（1：4）



1）5Y4/2　灰オリーブ色粗砂混じり粘土質シルト
径0.5cm未満の礫少量入る　鉄分沈着　やや軟質
（近現代堆積層）
2）5Y5/1　灰色細砂混じり粘土質シルト
径1cm未満の礫少量入る　マンガン粒入る　鉄分沈着
締まり悪い　やや軟質（中近世耕作土）
3）7.5Y4/1　灰色粗砂混じり粘土質シルト
径1cm未満の礫少量入る　炭化物入る　やや締まり悪い
（中近世耕作土）
4）5Y3/1　オリーブ黒色粗砂混じりシルト
同色粗砂ブロック30%程度入る　径2cm未満の礫少量入る
5）7.5Y3/1　オリーブ黒色粗砂～粗砂混じりシルト
径2cmの礫多量入る　締まり悪い（洪水砂）

1）5Y4/2　灰オリーブ色粗砂混じり粘土質シルト
径0.5cm未満の礫少量入る　鉄分沈着　やや軟質（近現代堆積層）
2）5Y5/1　灰色細砂混じり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る
マンガン粒入る　鉄分沈着　締まり悪い　やや軟質（中近世耕作土）
3）7.5Y4/1　灰色粗砂混じり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　炭化物入る
やや締まり悪い（中近世耕作土）
4）7.5Y3/1　オリーブ黒色粗砂～粗砂混じりシルト　径2cmの礫多量入る
土器片入る（弥生時代後期～古墳時時代後期洪水砂）
5）5Y5/1　灰色細砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　炭化物入る
鉄分沈着　やや軟質（落込み）
6）5Y3/1　オリーブ黒色粗砂混じりシルトブロックと　同色粗砂ブロックの混合層
径2cm未満の礫少量入る（土坑1）
7）5Y5/2　灰オリーブ色粗砂混じりシルトと粗砂の互層
径1cm未満の礫多量入る　締まり良い　やや軟質（地山）

図53　調査区平・断面図（1：100）

2区では、GL-1.4mまで盛土、-1.8mまで中近世耕作土、-1.95mまでオリーブ黒色粗砂～粗砂混じりシルトを主体とする弥生時代後期～古墳時代後期の洪水砂を確認した。これ以下は、締まりの良い灰オリーブ色粗砂混じりシルトと粗砂の互層である無遺物層（地山）となる。地山上面では、土坑1基と溝1条、南へ下がる落込みを検出した。遺構内から弥生時代後期の土器片が出土したため、この面を弥生時代後期遺構面と認識した（図53）。

（2）遺構と遺物

土坑1

2区北東隅で検出した遺構である。検出長1.3m、検出幅0.7m、最大深度は0.2mを測る。平面形状は南北に長い隅丸方形に復原できる。埋土はブロック土を多く含むことから、人為的に埋め戻されたものと推定される。埋土から、弥生土器壺の破片が出土した（図52-1）。

溝2

2区西辺で検出した遺構である。検出長2.7m、最大幅0.3m、最大深度は0.15mを測る。断面形状は不定形な逆台形、埋土はオリーブ黒色粗砂混じりシルトを主体とする。遺構の端は南北ともに調査区外へ続くが、北端では湾曲する。竪穴建物壁溝の可能性がある。遺物の出土はなかった。

出土遺物

図52-1は、弥生土器壺の口縁部である。粘土帯を貼り付けて肥厚させた口縁端部に面を作り、凹

線を施した後、円形浮文を付す。色調は灰白色～にぶい橙色を呈する。弥生時代後期前半の製品である。土坑１より出土した。図52-2は弥生土器壺の底部である。残存部位は僅かであるが、平底で大きく開く体部を持つ。落込み内より出土した。図52-3は須恵器杯蓋である。口縁の一部で、外面に稜が突出して残る。古墳時代後期初頭の製品である。遺構面を覆う洪水砂から出土した。

３　まとめ

以上、大藪遺跡における試掘調査の成果について記述した。今回の調査では、弥生時代後期の遺構面を確認し、当該期の集落がより西へ広がる可能性を示した。

弥生時代後期の大藪集落には、北西から南へ向かって流れる旧河川（図49流路１）があり、これより西では大型棟持柱建物や竪穴建物を有する居住域が発見されている。これに比して、流路１から集落東限（同流路２）までのエリアは、当該期の遺構が希薄である。しかし、その南では竪穴建物が集中して設けられているなど、遺跡内における遺構密度には濃淡がある。おそらく建物は一定のコロニーを形成しつつ点在していたと考えられる。

桂川右岸地域には、大藪遺跡のほか、中久世遺跡や東土川遺跡等、弥生時代の遺跡が多く立地する。近年の調査成果によってその範囲は拡大する傾向にあり、個々の遺跡単位を超えた地域的な考察が必要である。また、居住域の近隣に存在していたであろう生産域（水田）への視点も重要である。大藪遺跡では、試掘調査や詳細分布調査において湿地状の堆積が所々で確認されているが、これが水田の原資となった可能性がある。周辺遺跡の動向把握もあわせ、今後の課題としたい。

（黒須亜希子）

註

１）調査７の成果により大藪遺跡は一部範囲を拡大する。

引用文献

調査１（財）京都市埋蔵文化財研究所「24大藪遺跡」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』2000年

調査２　大藪遺跡発掘調査団・安西工業（株）『大藪遺跡発掘調査報告書』2002年

調査３　京都市文化市民局「大藪遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成24年度』 2013年

調査４（財）京都市埋蔵文化財研究所『大藪遺跡・下久世遺跡』2019年

調査５（財）京都市埋蔵文化財研究所『大藪遺跡・下久世構跡』2023年

調査６（株）イビソク関西支店『長岡京跡・大藪遺跡』2016年

調査７　京都市文化市民局「大藪遺跡（18S738）」『令和元年度　京都市内遺跡詳細分布調査報告』2020年

調査８（財）京都市埋蔵文化財研究所「35長岡京左京一条三坊・大藪遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994年

調査９　京都市文化観光局「第Ⅰ章　長岡京左京一条三坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報』1988年

Ⅳ　調査一覧

1　2023年１～３月期（令和４年度）

平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
1	漆室跡・一条大路跡	上京区一条通御前通東入西町 24	3/6	GL-0.8 mで黒色泥砂の黒ボク土、-1.1 mでにぶい黄橙色粗砂から砂礫の地山。-1.2 mでにぶい黄褐色粗砂。	29㎡	22K520
2	内膳司跡	上京区千本通出水上る福島町 386、387	2/10	GL-0.85m で黒色砂泥の地山。	16㎡	22K410
3	右馬寮跡	中京区西ノ京右馬寮町 8-9、7-14、7-15	2/22	GL-1.04 mで明黄褐色砂礫の地山。顕著な遺構・遺物なし。	13㎡	22K583

平安京左京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
4	一条三坊十一町跡、旧二条城跡	上京区烏丸通下立売上る桜鶴円町 380- 2　他１筆	1/30・31	GL-1.0m で中世の遺構を検出。**発掘調査を指導。**	93㎡	22H369
5	三条二坊十五町跡、妙顕寺城跡	中京区御池通西洞院西入石橋町 438-5　他１筆	2/1	GL-0.8 mで平安時代の土壌を検出。**発掘調査を指導。**	22㎡	22H237
6	三条四坊八町跡、等持寺跡	中京区堺町通二条下る杉城町 624、626、628、628-1	1/26	GL-0.60m で近世包含層、-0.80m で時期不明整地層、-0.95m で中世整地層、-1.20m で平安時代後期整地層、-1.40m で平安時代整地層（ウグイス層）、-1.80m でオリーブ褐色シルトの地山か。**発掘調査を指導。**	39㎡	22H300
7	九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内（東寺旧境内）	南区八条通大宮西入八条町 436、435-2、同区壬生通八条東入東寺町 554-5、554-6、598-1、598-4	2/9	GL-0.25 ～ -0.50m で暗褐色粘性細砂の近代包含層、-0.60m で黒褐色中砂の近代包含層、-0.90m で暗灰黄色微砂～細砂の時期不明整地層、-1.05m で黒褐色シルトの地山。地山上面で溝を検出。**本文７ページ。**	15㎡	22H451
8	九条四坊十五町跡	南区東九条北河原町 3- 1、3- 8	3/14	GL-1.26m で黄灰色泥砂の耕作土、-1.37m で黒褐色泥砂の床土、-1.49m 以下褐灰色砂礫の洪水堆積。	20㎡	22H454

平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
9	六条三坊十五町跡、西京極遺跡	右京区西院久保田町 6-5 ほか	2/15・16	GL-1.3 mでにぶい黄橙色シルトの地山を確認。地山上面で柱穴などの遺構を検出。**発掘調査を指導。**	134㎡	22H147
10	七条一坊八町跡	下京区朱雀分木町 44	1/10	GL-0.25m で地山を確認。状態不良ながら皇嘉門大路の東側溝及び内溝と考えられる溝を確認。**本文 10 ページ。**	41㎡	22H252
11	八条三坊五町跡	南区吉祥院西ノ庄西浦町 82-1 の一部、82-2	2/13	GL-1.4 m以下、水成堆積。	10㎡	22H428
12	八条四坊六町跡	右京区西京極畑田町 34-1、35、36、37、38、39-2、国有地	2/28	GL-0.3 ～ -1.7 mで暗褐色砂礫の河川堆積。顕著な遺構・遺物は確認できず。	72㎡	22H319

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
13	仁和寺院家跡	右京区宇多野長尾町 33-1	1/17 ～ 19	GL-0.9 ～ -2.6m の基盤層。顕著な遺構・遺物は確認できず。	78㎡	22S350

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
14	梁瓶野瓦窯跡	左京区岩倉幡枝町 641-17、641-18、641-19	2/2	GL-0.2 mで地山を検出。遺構・遺物は確認できず。	39㎡	21S549
15	植物園北遺跡	左京区松ヶ崎今海道町 5-1、5-10、5-11	1/20	GL-1.6mで黒褐色砂泥の遺物包含層。遺構面残存の可能性がある。**設計変更を指導。**	8㎡	22S450
16	御土居跡	北区平野鳥居前町 24-7	1/11	GL-0.4 ～ -2.0 mまで近現代の造成土を確認。顕著な遺構・遺物は確認できず。	20㎡	22S505

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
17	白河街区跡	左京区聖護院円頓美町 9の一部	3/7 ～ 9	GL-0.8 mで中世、-1.0 mで平安時代の遺構面が良好に遺存。**発掘調査を指導。**	125㎡	22S575
18	法勝寺跡、白河街区跡、岡崎遺跡	左京区岡崎法勝寺町 117、117-2、118-3	3/17	GL-0.30m で灰黄褐色泥砂の近世包含層、-0.45m で褐灰色泥砂の近世整地層、-0.55m で黒褐色細砂の近世整地層、-0.80m で黒褐色細砂の地山か。	15㎡	22R598

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
19	人康親王山荘跡	山科区安朱馬場ノ東町 17、17-1、17-2、19-2、20、同区安朱東海道町 25-1	1/27 ・2/7 ・8	GL-0.7m で黒褐色微砂混じり粘土質シルト、-1.2m で灰色細砂混じり粘土質シルトの地山。顕著な遺構・遺物は確認できず。	160㎡	22S336

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
20	鳥羽離宮跡、竹田城跡、鳥羽遺跡	伏見区竹田中内畑町 11、12	3/16	GL-0.55m で竹田城跡、-0.87m で鳥羽離宮跡に関連する可能性のある東西溝を確認。**設計変更を指導、遺構は地中保存。本文 30 ページ。**	24㎡	22T591
21	木津川河床遺跡	伏見区淀美豆町 979-1 他	3/27	GL-0.5 mで旧耕作土、-0.75 mで近世耕作土、-1.0 mで時期不明耕作土、-1.2 ～ -2.2 mで湿地堆積。遺構・遺物は確認できず。	47㎡	22S503

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
22	左京一条四坊三・四町跡、一条条間南小路跡、東上川遺跡	南区久世東上川町 285-1、286-3、287-1、289-1	3/3	GL-0.3 m～ -1.2 mで弥生時代中期、長岡京期、鎌倉時代の遺構面を確認。土坑、溝、ピットを多数検出。**発掘調査を指導。本文 40 ページ。**	69㎡	22NG595
23	左京三条三坊九町跡、鴨冠井清水遺跡	伏見区久我西出町 3-12、3-13、3-150	3/22	GL-0.5 mで東三坊坊間東小路側溝の可能性がある溝を検出。**発掘調査を指導。**	58㎡	22NG495
24	左京五条三坊九町跡	伏見区羽束師菱川町 270-2	1/23 ・24	GL-0.20m で時期不明包含層、-0.30m で中世包含層、-0.35 ～ -0.40m で弥生～古墳時代包含層、-0.50m で河川堆積の地山、-0.85m で湿地状堆積の地山。	16㎡	22NG354

南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
25	大藪遺跡	南区久世殿城町 381-1、537-1、541-2、542	2/27	GL-1.4 mで中近世耕作土、-1.8 mで弥生時代後期～古墳時代後期初頭の洪水砂、-1.95 mで地山。地山上面で弥生時代後期の土坑、溝、落込みを検出。**設計変更を指導。本文 44 ページ。**	15㎡	22S438

2　2023年４～12月期（令和５年度）

平安宮

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
26	大蔵省跡	上京区千本通中立売上る玉屋町 39、同区中立売通千本東入丹波屋町 352	12/15	GL-1.1 ～ -1.2 m で明黄褐色粘質シルトの近世包含層、-1.4 m で拳大礫を多量に含む褐灰色粘質土、-1.5 ～ -1.9 m でにぶい黄橙色粘質シルトの地山。顕著な遺構・遺物は確認できず。	23㎡	23K380
27	主殿寮跡、聚楽第跡	上京区中立売通浄福寺東入新例屋町 427　他	4/3・4	GL-1.0 ～ -2.2m で黄灰色礫混じり粘質土や黒褐色礫混じり粘質土、-2.2 ～ -2.65 m で黄色～浅黄色粘質土。聚楽第跡の堀の埋土か。	52㎡	22K548
28	内蔵寮、縫殿寮跡、聚楽第跡	上京区千本通上長者町下る革堂前町 104、108、同区上長者町通千本東入二丁目山王町 506-1 他	5/22 ～ 24	GL-2.25m で暗オリーブ色砂礫～礫混じりシルト、-3.75 m で黄褐色砂礫。聚楽第の堀と想定できる遺構を確認。**発掘調査を指導。**	135㎡	23K090
29	掃部寮跡	上京区仁和寺街道六軒町西入四番町 150-7、151-23	5/10	GL-1.33m でにぶい黄橙色砂礫の地山。地山上面で平安時代の土坑を確認。	20㎡	23K031
30	宴松原跡	上京区七本松通下長者町下る三番町 267	11/2	GL-1.24m で明黄褐色シルトの地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	7㎡	23K271
31	中和院跡、聚楽遺跡	上京区十四軒町 410　他	5/19	GL-0.35 m で近世包含層、-1.2 m で固く締まる黒褐色粗砂混じりシルトの整地層、-1.3 m で暗褐色～黒褐色砂礫混じりシルトの地山。地山上面で溝状遺構を確認。**発掘調査を指導。**	22㎡	23K083
32	左兵衛府跡	上京区下立売通大宮西入浮田町 613-1、616	11/6	GL-1.14 m で明黄褐色砂礫混じりにぶい黄橙色粘質土、-2.07 m で灰色粘質土、-2.26 ～ -2.43 m で黄褐色粘質土の地山。顕著な遺構・遺物なし。	44㎡	23K330
33	中務省跡、聚楽遺跡	上京区下立売通千本東入下る中務町 486-13、-15、-159	6/28	GL-0.6 ～ -1.3 m で灰黄褐色シルト～明黄褐色シルトの地山。平安及び近世遺構面の遺構面が良好に残る。**発掘調査を指導。**	33㎡	23K113
34	主水司跡	上京区日暮通丸太町上る西入西院町 918、919	4/10	GL-1.6m で黒褐色粘性細砂の近世包含層、-1.8m で褐色シルトの地山。	18㎡	23K007
35	豊楽院跡	中京区聚楽廻中町 45-1	11/17	GL-0.13m で径１～ 3cmの礫含む灰黄褐色細砂の近世包含層、-0.3m で径１～ 3cmの礫含む暗褐色泥砂の地山。	6㎡	23K263

平安京左京

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
36	二条二坊十町跡、高陽院跡、二条城北遺跡	中京区竹屋町通堀川東入西竹屋町 507、509	12/14	GL-0.8 ～ -1.1 m で炭化物を含む灰黄褐色粘質土、-1.1 ～ -1.3 m で灰黄褐色粘質土、-1.3 m で灰オリーブ色粘質土（表面はやや硬化）、-1.5 m で黄灰色砂質土、-1.7 m でにぶい黄褐色粘質土や暗褐色粘質土、にぶい黄色粘質土の無遺物層。各面にて土坑や溝等を検出。**発掘調査を指導。**	35㎡	23H370
37	三条一坊十町跡	中京区西ノ京職司町 67-4	4/12	GL-1.76m まで解体掘乱。	2㎡	22H536
38	四条一坊一町跡	中京区壬生朱雀町 25-3、25-5	4/26・8/28	GL-1.1 ～ -1.6 m でにぶい黄褐色砂礫～灰色微砂の地山。朱雀大路東側溝推定地で南北方向の砂礫堆積を確認。	62㎡	23H036
39	四条一坊十一町跡	中京区壬生坊城町 57-1	7/27	GL-0.9m で黒褐色中砂の遺物包含層、-1.1m で褐色砂泥の地山。	4㎡	23H196
40	四条四坊八町跡、三条せと物や町跡、烏丸御池遺跡	中京区三条通高倉東入桝屋町 69	5/8	GL-1.0 ～ -2.2 m で平安～江戸時代の整地層６層、-2.2m でにぶい黄褐色砂礫の地山。平安～江戸時代の遺構面を確認。**設計変更を指導、遺構は地中保存。**	37㎡	23H053
41	五条一坊十三町跡	下京区高辻大宮町 113-6 他５筆	9/21	GL-0.7m でにぶい赤褐色礫混じり粗砂の地山。	20㎡	23H157

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
42	五条三坊十一町跡、烏丸綾小路遺跡	下京区室町通高辻上る山王町 543、545、548	6/5	GL-0.6 mで室町時代遺構面、平安～中世の遺構面が良好に遺存。**発掘調査を指導。**	36㎡	23H112
43	六条四坊六町跡、寺町旧域	下京区富小路通五条下る本塩竈町 596 他	10/25・26	敷地の西半で、GL-2.28 ～ 3.07 mで平安～江戸時代初期の遺構面を 4 面確認。地山は確認できず、さらに下層に 1 面以上の遺構面がある。**発掘調査を指導。**	56㎡	23H243
44	七条一坊十三町跡、東市跡	下京区大宮通七条上る御器屋町 30	12/8・12	GL-1.3～-1.7 mでにぶい橙色砂礫の河川堆積(地山)。遺構・遺物は確認できず。	26㎡	23H386
45	八条四坊九町跡	下京区郷之町　地内	6/6・7	GL-1.0 m以下、河川堆積。	24㎡	23H109
46	九条一坊一町跡	南区八条源町 45、45-1、45-3、45-6、45-7	4/20	GL-0.6 mで灰黄褐色シルトの近世以降の包含層、-0.75 m～-1.25 mまで微砂と砂礫の互層、-1.25 mで暗オリーブ色砂礫。	27㎡	22H576
47	九条一坊四町跡、羅城門跡	南区四ツ塚町 40、41、43-1	6/22	GL-0.5 mで灰オリーブ色の礫を含む粘質土、-1.0 mで暗灰黄色粘質土、-1.2 mで灰色粘土、-1.4 mで暗緑灰色細砂混じりシルト、-2.3 ～-2.4 mでオリーブ灰色砂礫混じり粗砂のやや締まった河川堆積。	24㎡	23H155
48	九条一坊五町跡、壬生大路跡	南区八条内田町 1 の一部、1-3 の一部、1-4、1-5、1-6、1-7、1-8、1-9、1-10	6/30	GL-0.5 mで黒褐色シルト質細砂、-0.6 mで暗灰黄色シルト質細砂の地山。地山上面で土坑とピット、壬生大路の東側溝もしくは町域の内溝を検出。**発掘調査を指導。**	36㎡	23H015

平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
49	史跡妙心寺境内、北辺四坊三町跡	右京区花園妙心寺町 53	10/25	GL-0.4 m～-0.7m で時期不明の整地層。	9㎡	1N044
50	一条二坊九町跡、御土居跡	北区大将軍東鷹司町 164	11/7・9	GL-1.1 ～-2.0 mの間で堀状遺構の埋土、-2.0 mで明黄褐色粗砂混じり砂礫の地山。地中保存。	14㎡	23H358
51	一条二坊十五町跡、御土居跡	中京区西ノ京中保町 2、3、4	4/17	GL-0.55 mで灰オリーブ色砂礫、-0.65 mで灰色礫混じりシルト～砂礫の御土居構築土、-1.15 mでにぶい黄色砂礫の地山。**発掘調査を指導。**	19㎡	22H371
52	四条四坊五町跡	右京区西院四条畑町 30-19、30-15	6/8・9	GL-1.02 mで耕作土、-1.34 m以下湿地状堆積。	27㎡	23H117
53	五条一坊八町跡	中京区壬生高樋町 24-4、24-10	4/28	GL-0.5 mで黄褐色シルト～粗砂の地山。顕著な遺構・遺物なし。	58㎡	23H051
54	五条一坊十三町跡	中京区壬生下溝町 35-41、35-42、38-28、38-1、85	10/20	GL-0.65 m以下シルト～細砂。顕著な遺構・遺物なし。	19㎡	23H140
55	六条二坊十一町跡	右京区西院南高田町 1、2の一部	9/8	GL-1.5m で褐色砂礫の地山。	10㎡	21H222
56	七条一坊一町跡、御土居跡	下京区朱雀分木町 19-2 の一部　他	7/25	GL-1.25m で近代包含層、-1.35m で黒色微砂混じり粘土質シルトの御土居堀埋土、-1.7m でオリーブ黒色微砂混じり粘土質シルト、-2.35m でオリーブ黒色微差砂混じり粘土質シルト、-2.65m でオリーブ褐色砂礫の地山。**発掘調査を指導。**	34㎡	23H102
57	七条一坊四町跡、堂ノ口町遺跡	下京区朱雀北ノ口町 58-1 他 5 筆	9/29	GL-0.35m で黄灰色微砂の旧耕作土、-0.66m で灰褐色泥砂の地山。	42㎡	23H050
58	七条一坊八町跡	下京区朱雀分木町 44	6/12～15	GL-0.25m で黒褐色泥砂の旧耕作土、-0.4m で暗灰黄色砂泥～シルトの地山。地山面で皇嘉門大路東側溝を確認。**本文 10 ページ。**	29㎡	22H252

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
59	七条三坊七町跡	右京区西京極南庄境町 7-1	9/5	GL-1.1 ～ -2.1 mで黒褐色粘土の湿地状堆積。	45㎡	23H107
60	七条四坊二町跡	右京区西京極町ノ坪町 12-1 の一部、12-2	12/1	現地測量を実施。	0㎡	23H151
61	八条二坊七町跡、衣田町遺跡	下京区西七条石井町 47-1	8/17	GL-0.8 mで有機物や平安時代の遺物を含む黒褐色粘質シルト、-1.2 mで灰色泥土、-1.6 mで灰色シルト～細砂、灰色粗砂、黄褐色砂礫の地山。	22㎡	23H027
62	八条四坊十町跡	右京区西京極畑田町 1-1	5/15	GL-1.1 mで旧耕作土（旧表土）、-1.25 mで近世～近代耕作土、-1.4 mで河川堆積。遺構・遺物は確認できず。	31㎡	22H601
63	史跡西寺跡、九条一坊十一町跡、西寺跡、唐橋遺跡	南区唐橋西寺町 唐橋西寺公園　内	10/2 ～ 4	GL-0.6m で東西溝を確認。 **遺構は地中保存。本文 16 ページ。**	48㎡	5N024
64	史跡西寺跡、九条一坊十三町跡、西寺跡、唐橋遺跡	南区唐橋西寺町 65 唐橋小学校　内	8/21 ・22	GL-0.6m で西寺造営に伴うと考えられる整地層。	22㎡	5N016
65	九条四坊十二町跡	南区吉祥院中河原里西町 9-1、9-3、9-4	11/8	GL-1.66 mで明黄褐色シルト混じり砂質土、-1.70 ～ -2.95 mで黄褐色砂礫、にぶい黄褐色粗砂混じり砂礫の河川堆積。	30㎡	23H374

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
66	蜷川遺跡	右京区蜷川釈迦堂門前瀬戸川町 13-1　他	6/30	GL-0.3 mで時期不明包含層、-0.45 mで黒褐色シルトの上壌化層、-0.6 mでにぶい黄褐色シルト～浅黄色シルトの地山。	24㎡	22S605
67	太秦馬塚町遺跡	右京区太秦京ノ道町 1、1-2	4/14	GL-0.25m で黒褐色シルトの近世以降整地層、-0.4m で褐色シルトの地山。	33㎡	23S026
68	常盤仲之町遺跡	右京区太秦蜂岡町 13　他	5/18	GL-0.2 mで近世包含層、-0.4 mで中世包含層、-0.6 mで地山。地山上面でピット、土坑、溝、井戸を有する中世遺構面を検出。 **発掘調査を指導。**	54㎡	22S464

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
69	相国寺旧境内	上京区上御霊馬場町 366-2	11/20 ・21	GL-0.85 ～ -1.6 mで明褐色粘質土の室町時代包含層、-1.6 mでにぶい黄橙色礫混じり砂質土及び灰黄褐色砂礫の河川堆積。河川堆積を切り込んで室町時代の土坑が成立。	51㎡	23S397
70	北野天満宮	上京区馬喰町	10/19	隣接する御土居との高低差を確認。 **本文 24 ページ。**	12㎡	23S260
71	北野廃寺、北野遺跡	北区北野下白梅町 30	4/13	GL-0.2m で黒褐色泥砂の時期不明包含層（中世？）、-0.4m で黄褐色シルトの無遺物層（地山か）、-0.6m で灰黄褐色砂礫の地山。北野廃寺に係る瓦が出土。 **発掘調査を指導。**	45㎡	23S012

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
72	名勝円山公園	東山区八坂鳥居前東入円山町 626	9/25	GL-0.4 m以下、近世以前の整地層。ピット 1 基を検出。	17㎡	4N095
73	安祥寺下寺跡	山科区御陵平林町 20-2	6/19 ・20	GL-0.4 mで近代の整地層、-0.7 mでにぶい黄褐色泥砂の整地層、-1.2 mで黄橙色シルトの地山。にぶい黄褐色泥砂の整地層上面で平安時代の溝・土坑を確認。 **発掘調査を指導。**	59㎡	23S047
74	法住寺殿跡	東山区今熊野北日吉町 17	8/14 ・16	GL-1.3 mで黄橙色砂質シルトの地山。	35㎡	23S242

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
75	法住寺殿跡	東山区大仏南門通大和大路東入四丁目東辰町 684、692、682-2、684-5	9/11	GL-1.5 ～ -3.39 mで明黄褐色中～粗砂等の地山。南から北に向かって傾斜する落込みを確認。顕著な遺構・遺物は確認できず。	24㎡	23S098
76	大塚遺跡	山科区小山北溝町 2-1、2-2、2-3、4-1、4-2	5/29・30	GL-0.7 mでにぶい黄褐色砂礫の地山。顕著な遺構・遺物なし。	29㎡	23S068
77	大塚遺跡	山科区大塚野溝町 84- 1 他３筆	4/18	GL-0.65 mで黄褐色粘質シルトの地山、-0.75 mで黄褐色細砂～微砂、-0.9 mで暗灰黄色砂礫。	16㎡	22S214
78	山科本願寺跡(寺内町遺跡)	山科区西野左義長町 13-1 の一部	4/11	GL-0.4mでにぶい黄褐色砂泥の近世以後整地層、-0.6mで黄褐色砂泥の中世整地層、-1.1mで黒褐色泥砂の地山。**設計変更を指導、遺構は地中保存。本文 26 ページ**	19㎡	22S614
79	山科本願寺跡(寺内町遺跡)	山科区西野左義長町 13-1 の一部、13-9	4/11	GL-0.4mでにぶい黄褐色泥砂の近世以後整地上、-0.6mで黄褐色砂泥の中世整地層、-1.0mで黒褐色泥砂の地山。**設計変更を指導、遺構は地中保存。本文 26 ページ**	22㎡	22S615
80	山科本願寺跡(寺内町遺跡)、左義長町遺跡	山科区東野舞台町 20、21 の一部、22 の一部	11/15	GL-0.35mで黒褐色中砂(現代)、-0.55mで黒褐色細砂、-0.8mで黄灰色砂泥～シルトの地山。地山上面で平安時代の土坑を検出。**発掘調査を指導。**	17㎡	22S592
81	中臣遺跡	山科区東野森野町 1- 9、23	11/30	GL-0.68 ～ -1.29 mでオリーブ灰色粘質シルトの無遺物層、-1.3 ～ -1.72 mで河川堆積と考えられる明オリーブ灰色砂礫。顕著な遺構・遺物なし。	64㎡	23N384
82	法性寺跡	伏見区深草南明町 21 の一部、21-1 の一部他４筆・同区深草開土町 146-6 他３筆	7/18	現地測量を実施。	0㎡	22S593

伏見・醍醐地区

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
83	がんぜんどう廃寺	伏見区深草谷口町 64、70-23、111-26	5/17	GL-0.7m で暗オリーブ微砂混じりシルトの近世整地層、-0.9 mで灰オリーブ色微砂混じりシルトの地山。遺構・遺物は確認できず。	54㎡	22S340
84	伏見城跡	伏見区下板橋町 639、639-12　他	7/11・12	GL-0.6 mで黄灰色粗砂、-0.7mでにぶい黄褐色泥砂の近世盛土、-1.2mで地山ブロックを含む黒褐色細砂の時期不明遺構埋土、-1.35mで黄褐色シルトの地山。**設計変更を指導。**	80㎡	23F023

鳥羽地区

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
85	唐橋遺跡	南区吉祥院九条町 25、26、29	6/27	GL-0.5 m以下、旧天神川に伴う近現代の氾濫堆積。顕著な遺構・遺物なし。	20㎡	22S661
86	深草遺跡	伏見区深草西浦町五丁目 19- 1	12/11	GL-0.5 mで灰黄褐色砂質土、-0.85 mで黄橙色砂質土の地山。明確な遺構・遺物は確認できず。	32㎡	23S368
87	鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡	伏見区竹田西小屋ノ内町 50	8/29	GL-2.3 ～ -2.5 mまで撹乱。遺構・遺物は確認できず。	22㎡	23T259
88	富ノ森城跡	伏見区横大路六反畑他地内	8/1-3・11/22	1 区：GL-1.2 m以下、複数の遺構面。 2 区：GL-0.6 mで灰白色砂泥の地山。地山上面で室町時代の堀を検出。 3 区：GL-0.9 m以下、湿地状堆積。 4 区：GL-1.15 m以下、湿地状堆積。 **発掘調査を指導。**	76㎡	23S203
89	淀城跡	伏見区淀下津町 220-1、195-42	12/5・6	GL-0.85m で黄褐色細砂、-1.0m で暗灰黄色細砂、明黄褐色泥砂、にぶい黄褐色細砂が互層状・水平に堆積する整地層、-1.22m でにぶい褐色細砂の基盤層。	67㎡	23S077

長岡京地区（NG）

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
90	左京一条三坊十五町跡	南区久世東土川町 242-1、243、 同区久世大藪町 495-2　他 14 筆	11/16	GL-1.28m で暗灰色微砂混じりシルト、-1.29m で暗緑灰色シルト、-1.54m で灰色シルト、-2.08m で暗灰色粘土、-2.41m で灰色微砂、-2.76m で灰色粗砂。	31㎡	23NG278
91	左京一坊四条七町跡	伏見区久我石原町 9-15、9-17、9-18、9-19、9-20	10/2 ～ 10	GL-0.1m でにぶい黄褐色粘性泥砂の旧表土、-0.15 ～ -0.2m で黄褐色シルト質砂泥の地山。地山上面で弥生～古墳時代、長岡京期の遺構を多数検出。**発掘調査を指導。**	485㎡	23NG254
92	左京四条四坊三・四町跡	伏見区羽束師菱川町 532-4 の一部	6/29	GL-1.2 mにて緑灰色泥土の地山。地山上面で中世東西溝を確認。**設計変更を指導。**	4㎡	23NG029

南桂川地区

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
93	山田車塚古墳	西京区山田車塚町 10-1 他	12/25	GL-1.35m で耕作土、-1.5m でにぶい黄褐色シルト、-1.8m でオリーブ褐色シルト、-2.0 m で地山の黄灰色砂礫層。古墳は削平された可能性が高い。	27㎡	23S062
94	上久世遺跡	南区久世上久世町 320 他	7/3	GL-0.1 ～ -0.2 mで明黄褐色粘質シルトの地山。柱穴などを確認。**発掘調査を指導。**	219㎡	23S162
95	中久世遺跡	南区久世中久世町四丁目 18-1、18-2、18-3	10/24	GL-0.3 mで耕作土、-0.4 mで床土、-0.5mで黄褐色粘質土の地山、-0.85 mで灰色細砂～シルトの地山。地山上面で弥生～長岡京期の遺構・遺物を確認。**発掘調査を指導。**	54㎡	23S319
96	中久世遺跡	南区久世中久世町四丁目 90-1、90-2	5/12	GL-0.6m で旧耕作土・床土、-0.75 ～ -1.4m でにぶい黄色シルトの地山。	55㎡	23S028
97	中久世遺跡	南区久世殿城町 453、456-1、463、831	8/21 ～ 24	GL-1.75m で暗青灰色微砂の旧耕土、-1.86m で暗緑灰色シルトの旧耕土、-2.24m で暗青灰色シルトの流路、-2.43m で暗青灰色微砂の流路、-2.67m で青灰色微砂の流路、-3.01 ～ -3.06m で青灰色砂礫。	171㎡	23S054

京北地区

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
98	愛宕山古墳群	右京区京北塔町宮ノ谷 20-1、-2、-3、-5、 同区京北塔町愛宕谷 25、25-1、-3 の一部	6/23	GL-0.1 ～ -0.2 mで褐色礫混じりシルトの地山。	14㎡	23S086

表3　出土遺物概要表

	Aランク点数（箱数）	内　　訳	Bランク点数（箱数）	Cランク点数（箱数）	出土箱数合計
点数及び箱数	3箱 （25点）	弥生土器（7点）、土師器（4点）、須恵器（2点）、瓦器（4点）、白磁（1点）、瓦類（5点）、塼（1点）、石製品（1点）、	1箱	8箱	12箱

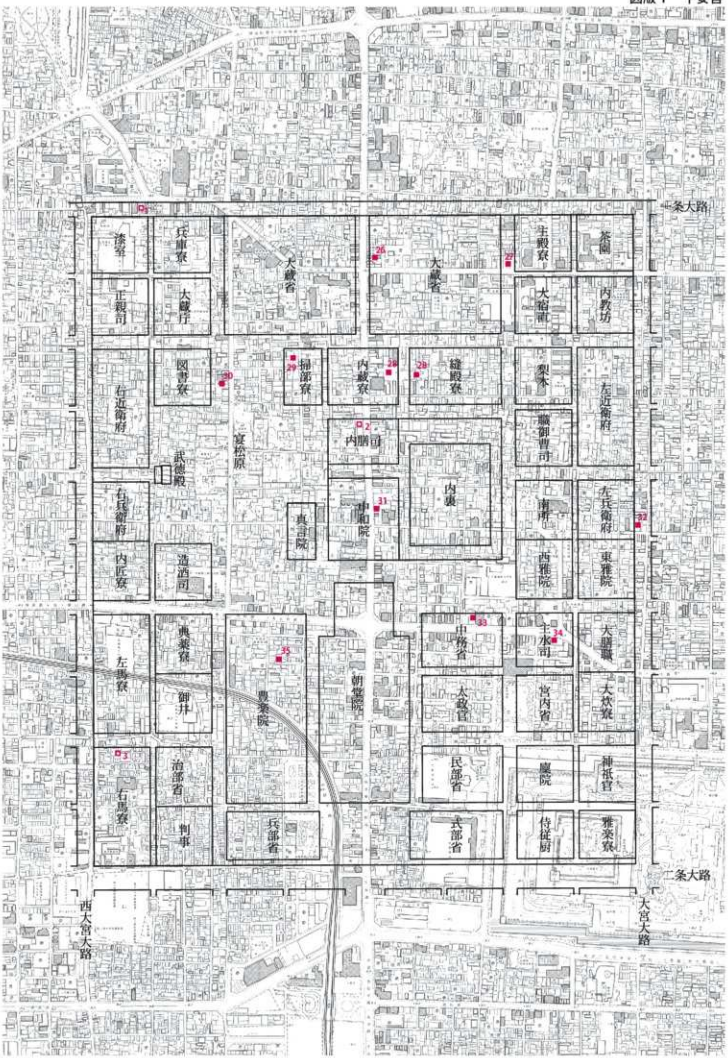
図　　版

凡　例

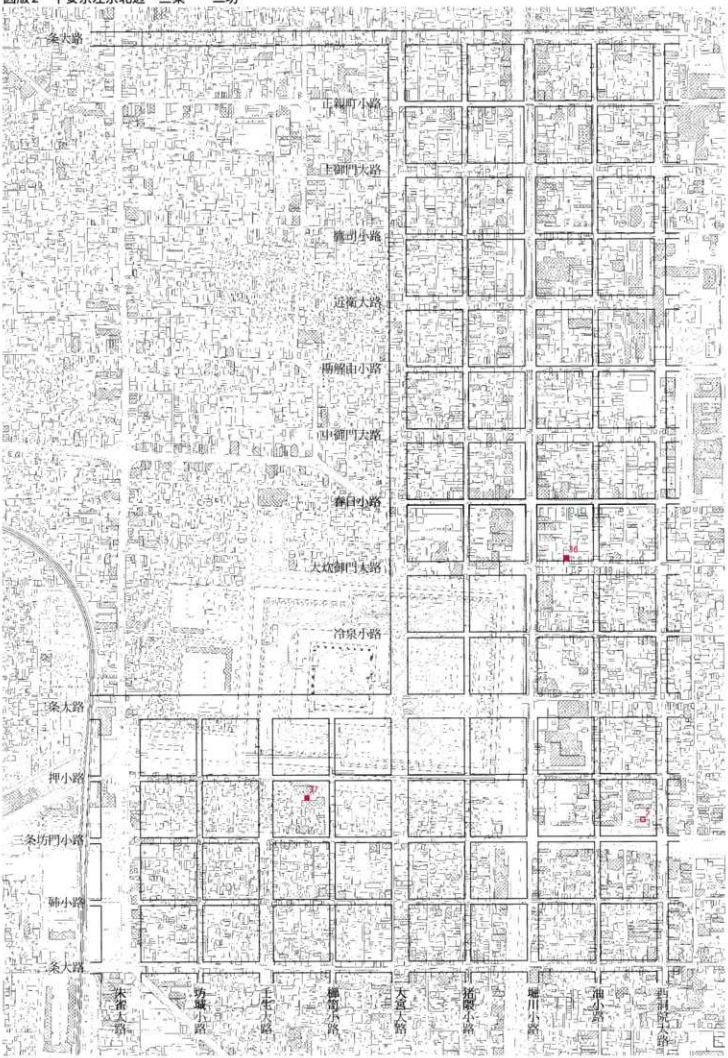
□　令和５年１月～ ３月（令和４年度） 試掘調査地点

■　令和５年４月～12月（令和５年度） 試掘調査地点

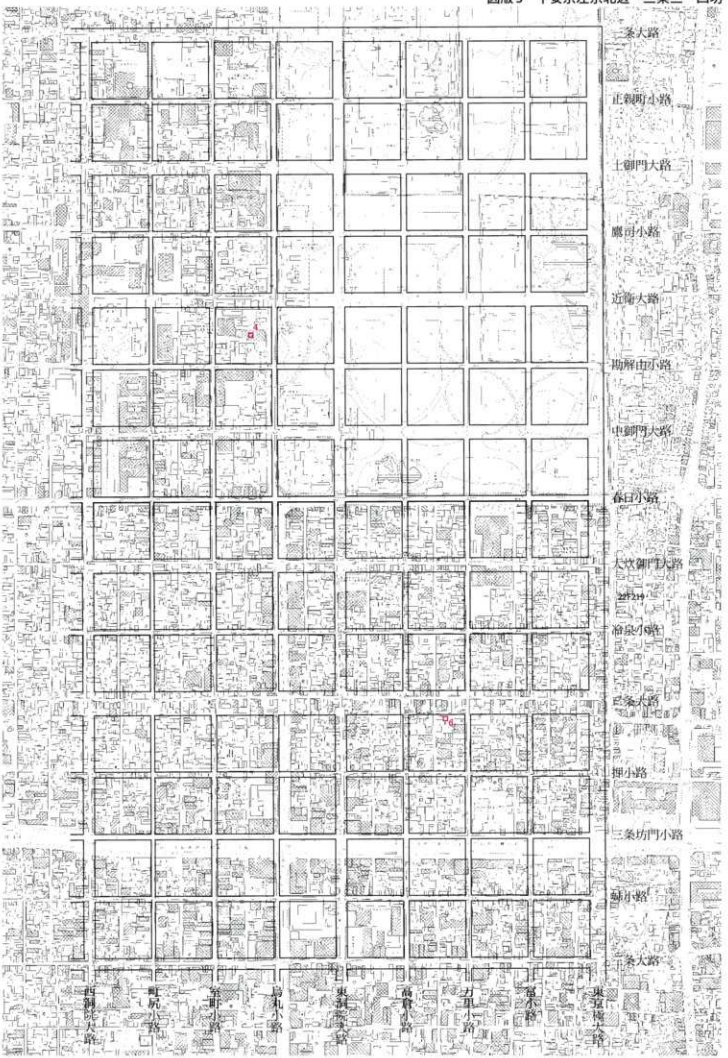
図版1　平安宮


一条大路
二条大路
西大宮大路
大宮大路
漆室
兵庫寮
正親司
大蔵省
大蔵寺
大蔵省
主殿寮
茶園
大膳職
内教坊
図書寮
右近衛府
宴松原
帰部寮
内蔵寮
縫殿寮
梨木
左近衛府
内裏
司
内膳
武徳殿
右兵衛府
内匠寮
造酒司
真言院
中和院
内裏
南所
左兵衛府
西雅院
東雅院
典薬寮
左馬寮
御井
豊楽院
朝堂院
中務省
主水司
大膳職
太政官
宮内省
大炊寮
治部省
右馬寮
刑部
民部省
内蔵
神祇官
兵部省
侍従所
雅楽寮

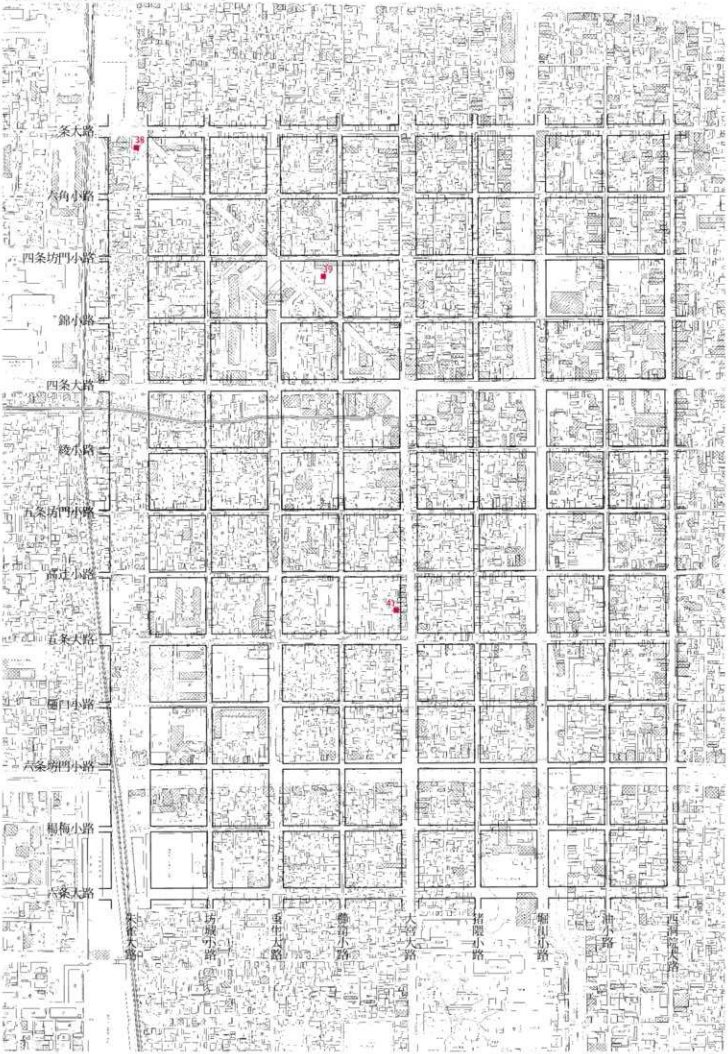
図版2　平安京左京北辺～三条一・二坊



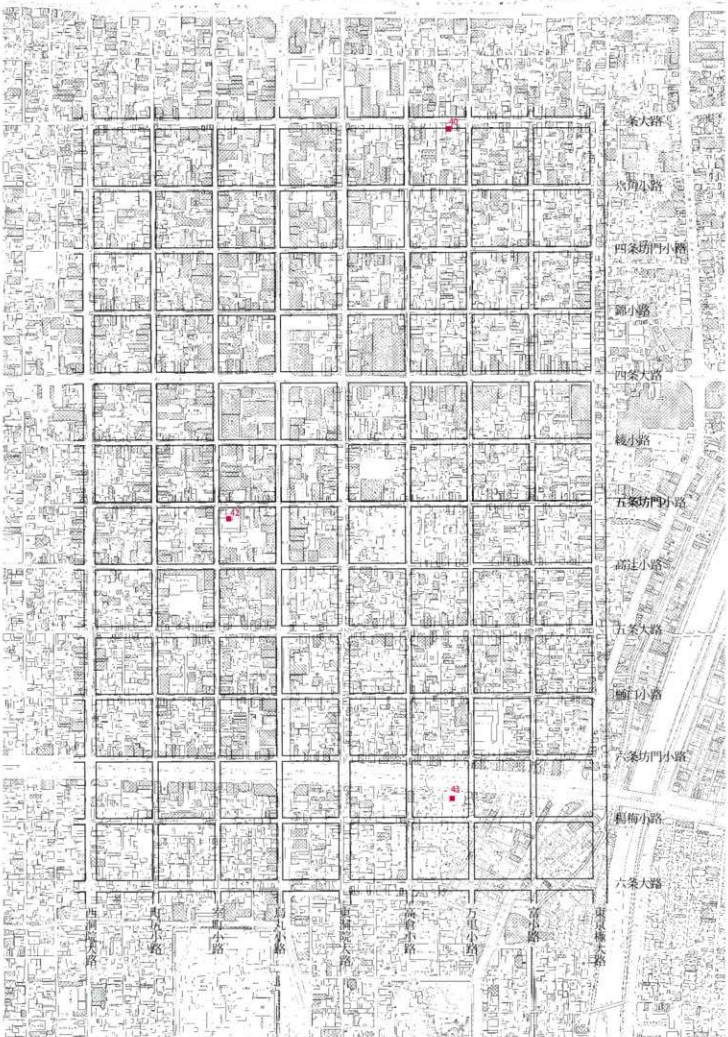
図版3　平安京左京北辺～三条三・四坊



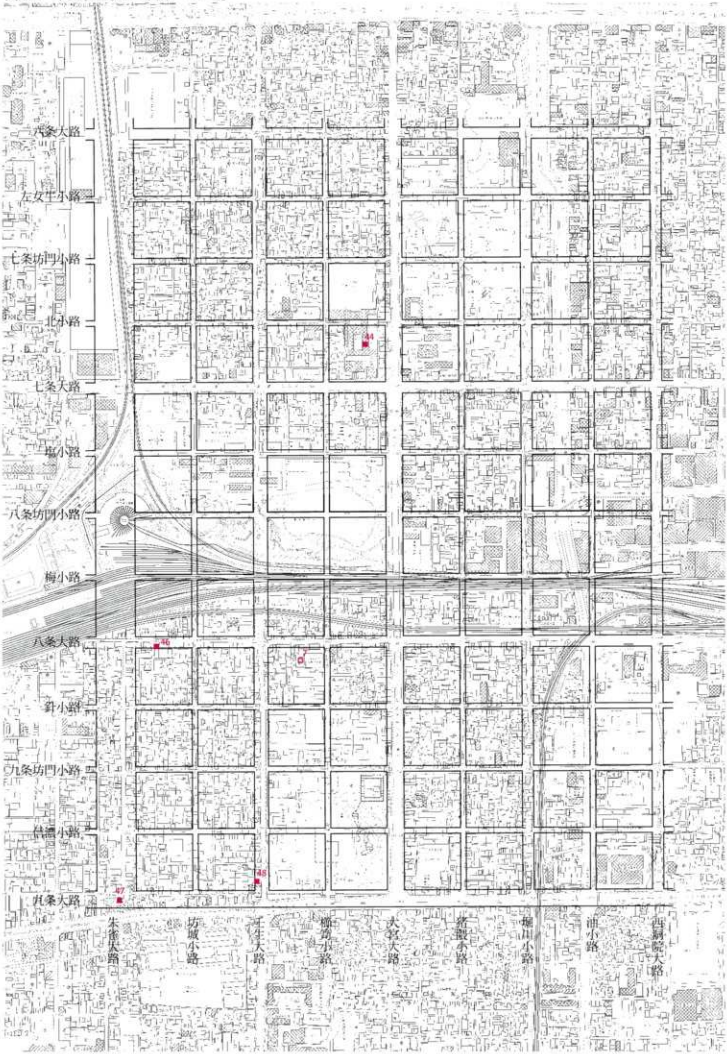
図版4　平安京左京四～六条一・二坊



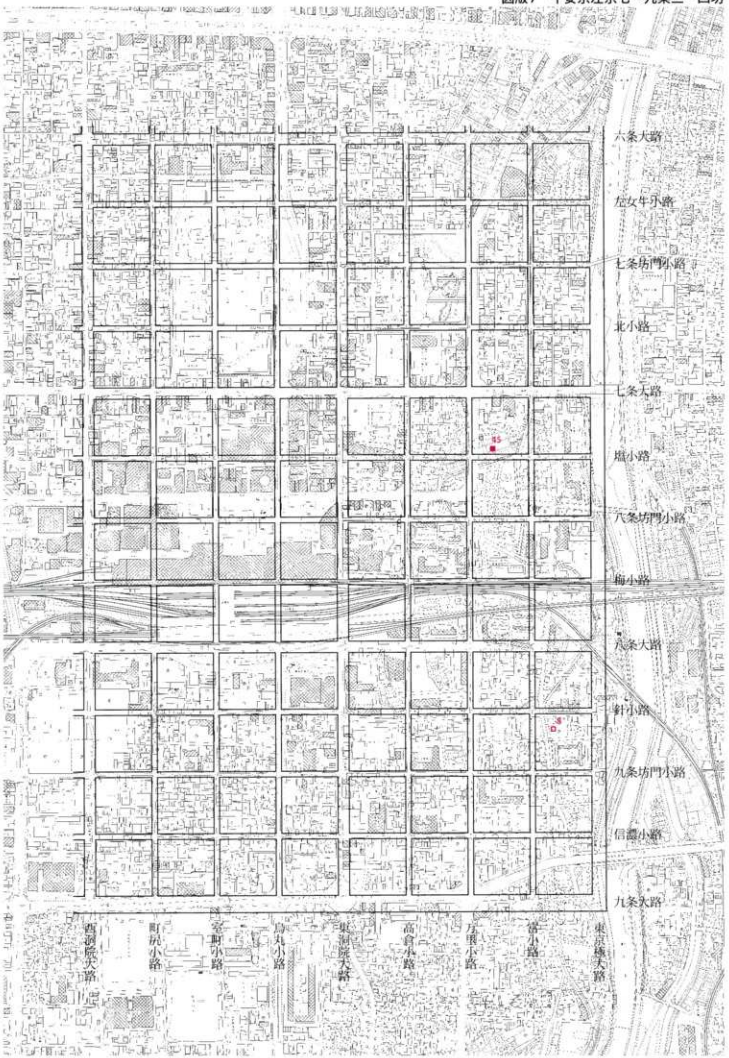
図版5　平安京左京四～六条三・四坊



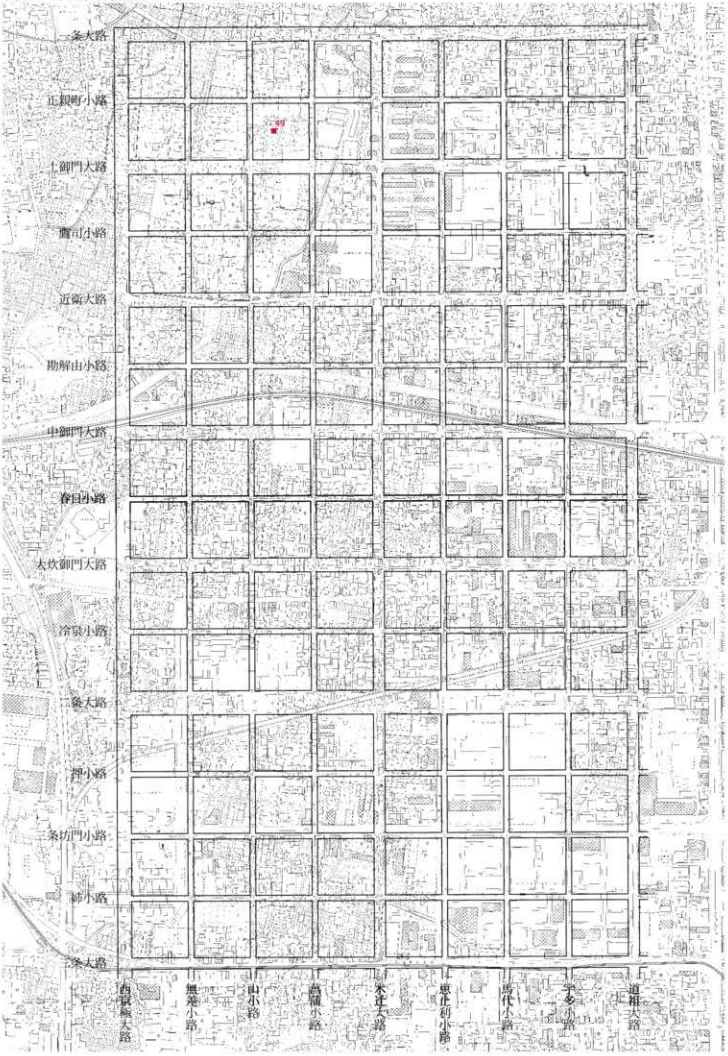
図版6　平安京左京七～九条一・二坊



図版7　平安京左京七～九条三・四坊

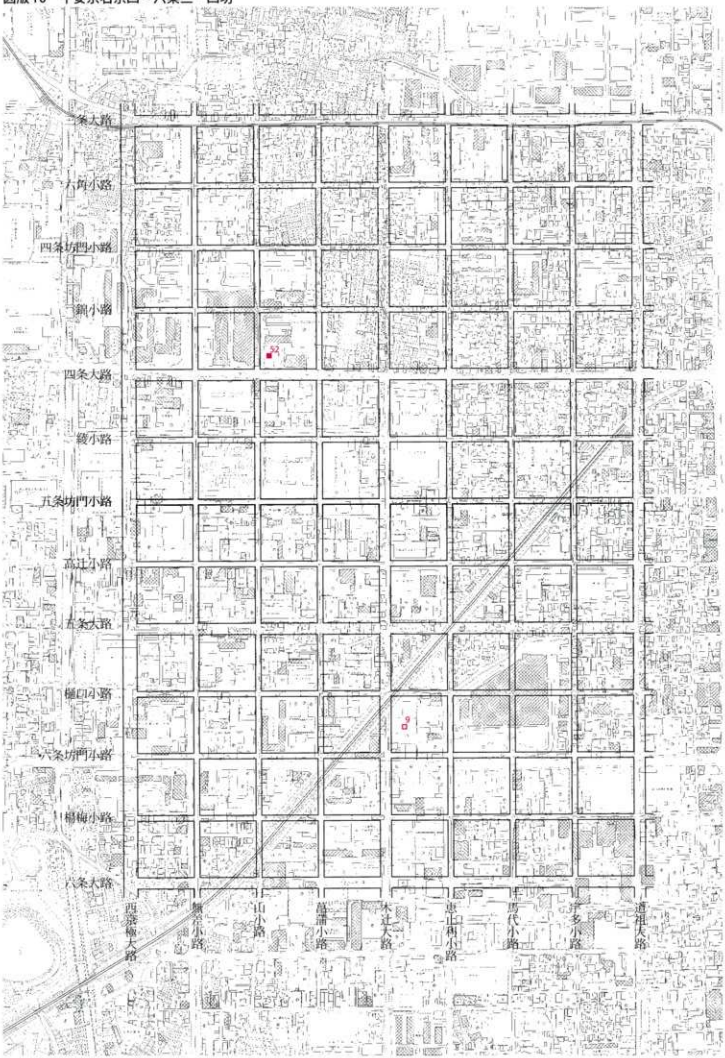


図版8　平安京右京北辺～三条三・四坊

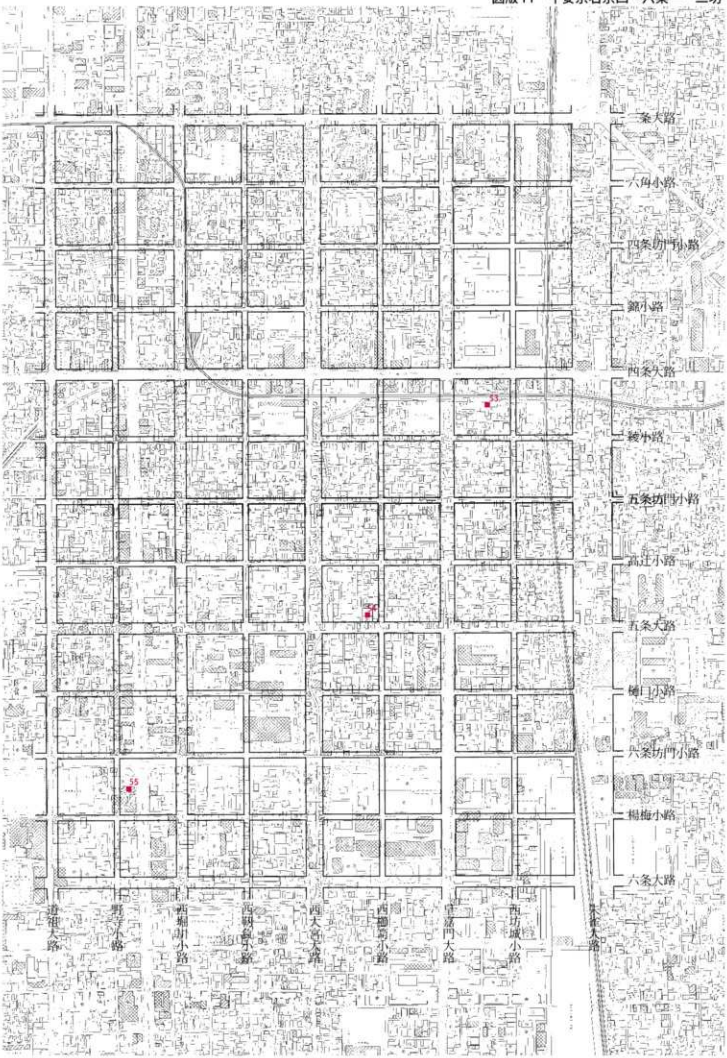


図版9　平安京右京北辺～三条一・二坊

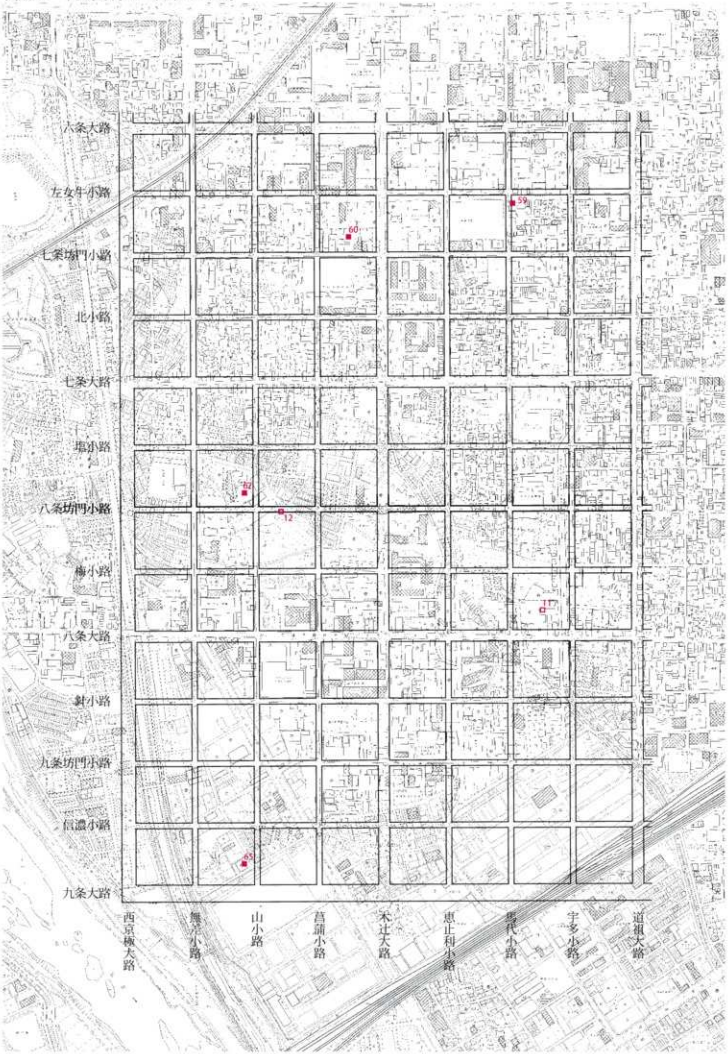
図版10　平安京右京四～六条三・四坊



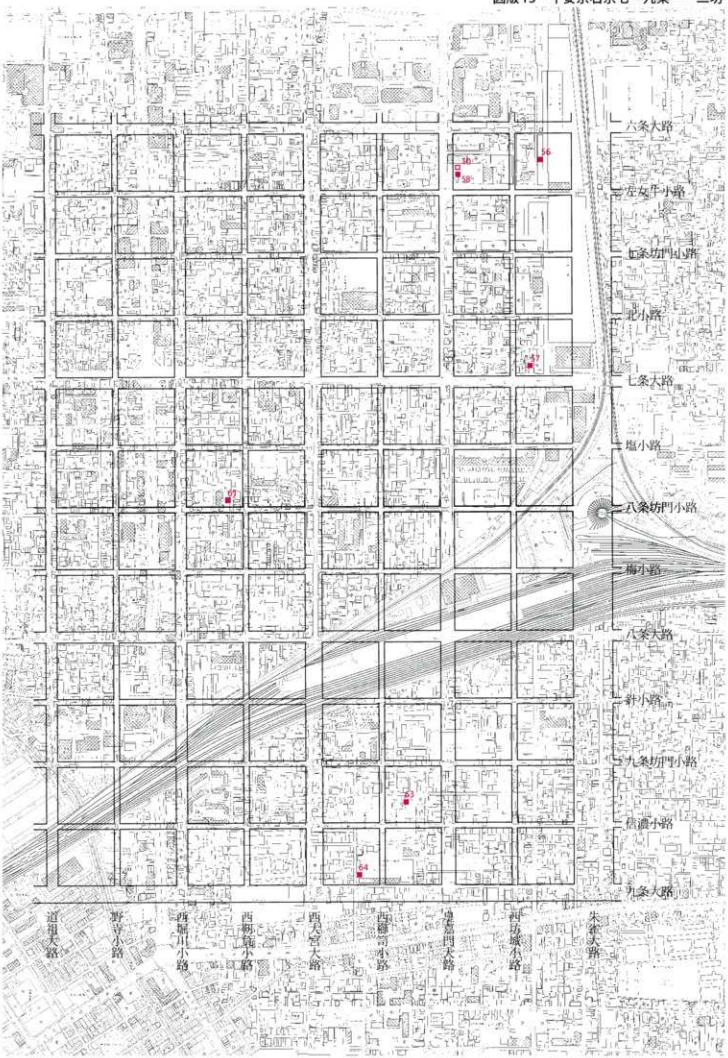
図版11　平安京右京四～六条一・二坊



図版12　平安京右京七～九条三・四坊



図版13　平安京右京七～九条一・二坊



報 告 書 抄 録

ふ り が な	きょうとしないいせきしくつちょうさほうこく　れいわごねんど
書　　名	京都市内遺跡試掘調査報告　令和５年度
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	馬瀬智光・西森正晃・家原圭太・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・熊井亮介・熊谷舞子・新田和央・黒須亜希子・清水早織・八軒かほり・佐藤　拓
編 集 機 関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所　在　地	〒604-8571　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 488 番地
発 行 機 関	京都市文化市民局
所　在　地	〒604-8571　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 488 番地
発 行 年 月 日	西暦 2024 年（令和6年）3月 29 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京左京 九条一坊九町跡、 教王護国寺旧境内 （東寺旧境内）	京都市南区八条通大宮 西入八条町 436、435-2 壬生通八条東入東寺町 554-5、554-6、598-1、 598-4	26100	1 758	34 度 59 分 02 秒	135 度 44 分 49 秒	2023/2/9	15	共同住宅 建設
平安京右京 七条一坊八町跡	京都市下京区朱雀 分木町 44	26100	1	34 度 59 分 32 秒	135 度 44 分 26 秒	2023/1/10 2023/6/12 ～6/15	29	共同住宅 建設
史跡西寺跡、 平安京右京九条 一坊十一町跡、 西寺跡、 唐橋遺跡	京都市下京区唐橋西寺町 京都市南区唐橋西寺町 唐橋西寺公園内	26100	A751 1 755 756	34 度 58 分 52 秒	135 度 44 分 18 秒	2023/10/2 ～10/4	48	防球 ネット 設置
北野天満宮	京都市上京区馬喰町	26100	220	35 度 01 分 54 秒	135 度 44 分 05 秒	2023/10/19	12	貯水槽 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京 九条一坊九町跡、 教王護国寺旧境内 （東寺旧境内）	都城跡 寺院跡	江戸時代	溝、柱穴	瓦、塼	
平安京右京 七条一坊八町跡	都城跡	平安時代	溝	土師器、瓦	皇嘉門大路東側溝、内溝を検出。
史跡西寺跡、 平安京右京九条 一坊十一町跡、 西寺跡、唐橋遺跡	都城跡 寺院跡 集落跡	平安時代	ピット、溝、 落込み	瓦	推定北小子房北で東西溝を検出。
北野天満宮	神社	近現代	盛土	瓦	

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きょうとしないいせきしくつちょうさほうこく　れいわごねんど
書　　名	京都市内遺跡試掘調査報告　令和５年度
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	馬瀬智光・西森正晃・家原圭太・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・熊井亮介・熊谷舞子・新田和央・黒須亜希子・清水早織・八軒かほり・佐藤　拓
編 集 機 関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所　在　地	〒604-8571　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 488 番地
発 行 機 関	京都市文化市民局
所　在　地	〒604-8571　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 488 番地
発 行 年 月 日	西暦 2024 年（令和６年）３月 29 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山科本願寺跡（寺内町遺跡）	京都市山科区西野左義長町 13-1 の一部、13-9	26100	626	34 度 58 分 50 秒	135 度 48 分 31 秒	2023/4/11	41	共同住宅建設
鳥羽離宮跡、竹田城跡、鳥羽遺跡、	京都市伏見区竹田中内畑町 11、12	26100	1166 1167-1 1169	34 度 57 分 13 秒	135 度 45 分 10 秒	2023/3/16	24	共同住宅建設
下鳥羽遺跡	京都市伏見区下鳥羽北ノ口町 47、48、49	26100	1170	34 度 56 分 28 秒	135 度 44 分 50 秒	2022/11/17・18	96	宅地造成
長岡京左京一条四坊三・四町跡、一条条間南小路跡、東土川遺跡	京都市南区久世東土川町 285-1、286-3、287-1、289-1	26100	3 783	34 度 56 分 48 秒	135 度 43 分 15 秒	2023/3/3	69	地中探査
大藪遺跡	京都市南区久世殿城町 381-1、537-1、541-2、542	26100	773	34 度 57 分 14 秒	135 度 43 分 01 秒	2023/2/27	15	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山科本願寺跡（寺内町遺跡）	寺院跡	室町時代？	溝		
鳥羽離宮跡、竹田城跡、鳥羽遺跡	離宮跡 城館跡 集落跡	鎌倉時代 室町時代	溝		竹田城跡の堀を確認。
下鳥羽遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代	溝、土坑、ピット	弥生土器、土師器、須恵器、勾玉模造品	
長岡京左京一条四坊三・四町跡、一条条間南小路跡、東土川遺跡	都城跡 集落跡	弥生時代 奈良時代（長岡京期） 鎌倉時代	竪穴、溝、ピット、落込み	弥生土器、土師器、瓦器	
大藪遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	溝・土坑・河川	弥生土器、土師器、須恵器	

京都市内遺跡試掘調査報告
令和５年度

発行日　２０２４年３月２９日
発　行　京都市文化市民局
編　集　京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
住　所　〒604-8571
京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 488 番地
TEL.（０７５）２２２－３１３０
印　刷　奥田印刷株式会社
京都市上京区下長者町通新町西入藪ノ内町７９
TEL.（０７５）２５４－０６４６